

ウガンダ北東部カラモジャにおける武装解除の実施シークエンス

波佐間 逸 博*

The Sequence of Disarmament Operations in Karamoja, Northeastern Uganda

HAZAMA Itsuhiro*

In Karamoja, northeastern Uganda, which borders Sudan and Kenya, the inflow of automatic rifles from neighboring Sudan and from Ugandan government troops began in the 1970s, through exchange and raiding. The pastoral Karimojong, Jie, Dodoth, Tepes, and Pokot have a history of shifting alliances and low-intensity conflict (LIC) revolving around cattle raiding using guns. The Ugandan government has disarmed the pastoral peoples in the past, and it began a new disarmament program, which these people call ‘harvesting guns,’ in 2001. This has resulted in an arms imbalance among groups, an increase in raids by groups that still possess guns, and many refugees from the disarmed groups. In addition, the forcible disarmament involves cordon and search tactics and torture in the army barracks. This paper examines the sequence involved in implementing the disarmament program in Karamoja and describes the essentialist frame that justifies the state dominating the pastoral peoples of the Karamoja, using physical violence combined with politics, administrative measures, and the military, and how their cooperation tragically leads the local people to a critical predicament. It also describes the history of the inflow of automatic rifles and their current use in the society. It is elucidated how “othering” poses an unjust threat to the daily lives of the pastoral peoples and has existential effects, and proposes recommendations to improve the disarmament sequence.

1. 序

「いくつものちいさな戦争があるわけではありません。構造的暴力を巨大な身体的暴力と葛藤へ翻訳する、ひとつの戦争が存在するだけです。周縁化された諸集団にたいするひとつの全世界的な戦争があるだけです」 [Straight 2009: 27]

ウガンダ・スーダン・ケニア三国国境地域に位置するウガンダ北東部カラモジャ (Karamoja)

* 長崎大学国際連携研究戦略本部・長崎大学大学院国際健康開発研究科, Center for International Collaborative Research, Nagasaki University, Graduate School of International Health Development, Nagasaki University
2011年11月11日受付, 2012年4月16日受理

地域では、国境をこえて遊動するカリモジョン (Karimojong)、ジエ (Jie)、ドドス (Dodoth)、テペス (Tepes)、ポコット (Pokot) など生業牧畜につよく依存した集団が、敵対と同盟をくりかえしてきた。1970年代以降、この地域には隣国である破綻国家スーダンと独裁軍事政権崩壊後のウガンダ中央政府軍から、略奪と交換をつうじて大量の自動ライフル銃が流入した。現在、この地域の牧畜民間では、これらの自動ライフル銃をもちいた家畜の略奪戦を契機とする低強度紛争 (Low Intensity Conflict: LIC) が頻発している。このような LIC の日常化にたいして、ウガンダ政府は 80 年代からカラモジャ地域に政府軍を派遣し、牧畜民の武装解除政策を実施している。しかし、この政策は民族間の所有武器数の不均衡をうみだし、逆に銃を手ばなさなかった集団による略奪と LIC を増加させ、銃を手ばなしたおおくの人のびとは国内避難民として居住地をおわれるにいたっている。また、2001 年から開始された現政権下での「銃刈り」¹⁾ の過程で、政府軍と牧畜民のあいだの LIC も頻発している。このようにカラモジャ地域は、隣国および自国の国家的統治の消失に起因する銃の流出と、ウガンダ政府による強引な介入を契機に、歴史的には戦いと平和の過程をくりかえしてきた牧畜民のあいだで「終わりなき戦い」が展開されるにいたった、トランスナショナルーナショナルーローカルな重層空間である。

本論は、LIC が日常化したカラモジャ地域に居住するカリモジョンとドドスにたいして、2001 年から開始されている武装解除の実施シーケンスに焦点をあてる。具体的には、武装解除実施における政治・行政・軍が一体となって行使される物理的な暴力、そして、住民側の危機的状況における協力行動にいたる流れとして記述する。また、その際、武装解除介入の対象である自動ライフル銃の社会への移入の歴史と現在の使用状況という背景もあわせて記述する。

本論の目的は、これらの記述をとおして、武装解除政策がカラモジャの現地住民の日常生活の持続に不合理的な脅威をもたらしていることを明らかにすることである。この新世紀に入り、カラモジャにおける武装解除が開始されて 10 年以上が経過しており、その実施プロセスをめぐって社会科学者たちが意見を提示している。本論の最後では、彼らの最新の発言を紹介し、そのなかで筆者なりの立場から実施政策への提言をおこなう。

2. 調査地の概要

カリモジョンとドドスは、ウガンダ共和国の北東部、ケニアや南スーダンとの国境付近に居住する Nilotic 語族、東ナイロート系の集団である (図 1)。その大部分は、カラモジャ地方 (Karamoja Sub-Region) に暮らしている。今日、「カラモジャ」という区分は実

1) カリモジョンとドドスは、武装解除を *akilem* 「刈る」 *ngatomyen* 「銃」と表現する。

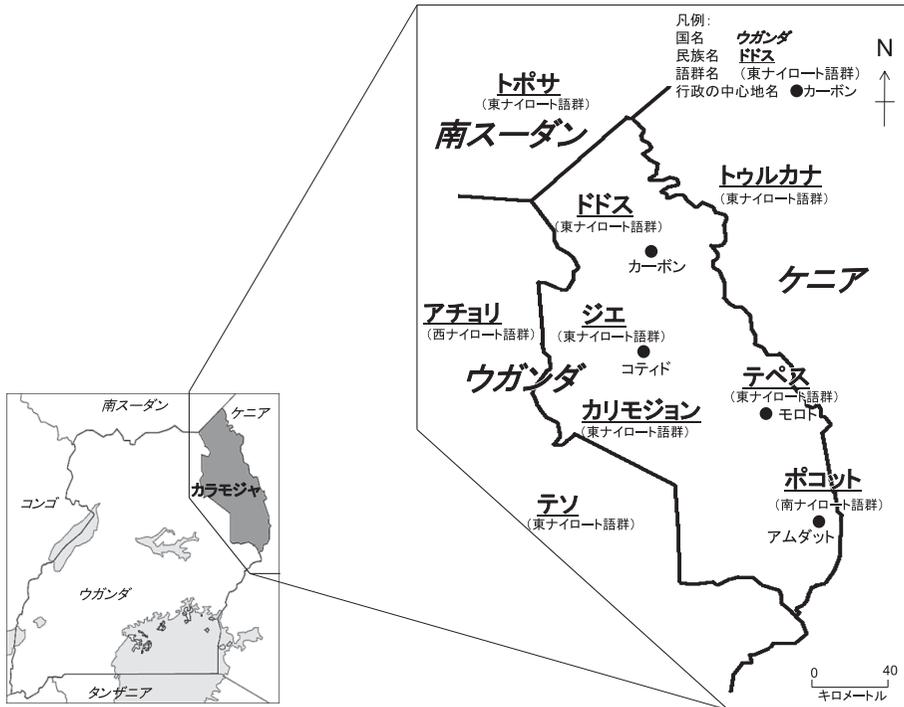


図 1 カラモジャ

質的な行政単位としては存在しないが、カーボン (Kaabong)、コティド (Kotido)、アビム (Abim)、モロト (Moroto)、ナカピリピリット (Nakapiripirit)、ナパック (Napak)、アムダット (Amudat) という 7 つの県 (District) にわけられた北東部乾燥地を、調査者やウガンダの人びとはしばしばカラモジャとよぶ。ガリバー [Gulliver 1953] やナイトン [Knighton 2005] などをはじめとして、マスコミや研究者は「カラモジョン (Karamojong)」という概念をおもに、この地域に居住するカリモジョン、ジェ、ドスという東ナイロート系牧畜集団を包括する概念としてもちいる。しかし、「カラモジョン」という語は、東ナイロート語の語彙には存在しない、外部社会からの他称である。そのうえ、各集団はそれぞれ固有の文化的価値、言語 (ただし相互に理解できる) および社会組織をそなえた、相互に異質な、時に敵対的な他者である。だが、彼らじしん農耕民や狩猟採集民との対比において、「家畜とともに生きる者」として自己規定するように、乾燥地に適応した牧畜という生業につよく依存し、生存の基盤をなす、牛をはじめとする牧畜家畜に至上の価値を付与するという、民族集団間の差異をこえて共有された特徴が存在する。そして、しばしば彼らは通婚や共住、放牧地の共有、家畜交換をつうじて個人レベルでの紐帯をきりむすんでいる。また、ドスは自分たちの言語を *Ngakarimojong*、すなわち「カリモジョン語」という名辞で指示する。つまりウガンダ北東部

の牧畜諸社会は、同一性を共有するクラスターとしてとらえることができる。本論文では、カリモジョンとドドスの居住地をふくむ北東ウガンダ全体を包括する概念を使用する必要がある場合には、「カラモジャ」という語を使用することにする。

カリモジョンとドドスが居住するカラモジャ地方の大部分は、サヴァンナ・ウッドランドに分類される半乾燥地であり、ウガンダではもっとも乾燥している。年間平均降雨量は500～700ミリメートルであり、乾季は最短でも6ヵ月と、国内では最長である。乾季はしばしば長期化して旱魃となり、地面を20メートル掘り下げなければ水が入手できないほど乾燥がふかまることもある。ケニア・ウガンダ国境沿いの岩がちな高原帯とくらべて、より肥沃な土壤にめぐまれた低地平原では農耕が可能である。しかし降雨は変動がおおきいうえに予測不可能であるため、農耕は単独で生活をささえる生業とはなりえない。人びとは3、4年に1度の割合で数百メートル程度移動する半定住的な集落 (*ere*) と、1回に数キロメートルを移動し、1カ所に1週間以上停留することはまれな遊動的な家畜キャンプ (*awi*) にわかれて住んでいる。いずれのキャンプでも環状集落をつくる。半定住集落では女性、乳幼児、老人が居住者全体にしめる割合が、家畜キャンプとくらべて圧倒的にたかい。

カリモジョンおよびドドス社会は、父系をたどって、現在生きている人の祖父の代までさかのぼる、深度の浅い、範囲の限定された父系出自集団によってなりたっている。これらの個々の出自集団は、名づけられた共通の出自集団 (*ateker* あるいは *emacar*) を構成する下位の集団とみなされている。筆者はカリモジョンで19、ドドスで26の外婚的な父系出自集団を確認した。しかし外婚の単位としての機能のほかに、血縁原理が日常生活で顕在する働きは存在しない。

血縁から独立した地縁の原理は、カリモジョンとドドス社会での非常に重要な要素である。これにもとづく集団、すなわち地域集団は、定住的な集落における近隣者の集団間での放牧な

表1 カリモジョンの地域集団

郡名	地域集団名	
ボコラ (<i>Bokora</i>)	ンギボコラ (<i>Ngibokora</i>)	陸亀の人びと
	ンギペイ (<i>Ngipei</i>)	リカオンの人びと
	ンギトメ (<i>Ngitome</i>)	象の人びと
	ンギモジンゴ (<i>Ngimozingo</i>)	サイの人びと
	ンギコソワ (<i>Ngikosowa</i>)	アフリカ水牛の人びと
	ンギカレーソ (<i>Ngikaleeso</i>)	ダチョウの人びと
マセニコ (<i>Matheniko</i>)	ンギマセニコ (<i>Ngimatheniko</i>)	種牛の人びと
	ンギモゴス (<i>Ngimogos</i>)	モゴスの丘の人びと
	ンギムノ (<i>Ngimuno</i>)	蛇の人びと
ピアン (<i>Pian</i>)	ンギピアン (<i>Ngipian</i>)	精霊／稲妻の人びと

出所：[Dyson-Hudson 1966; Novelli 1988] を改変。

ど、日常生活をとおして協同をおこなったという単純な事実にもとづく共感の束である。カリモジョンは 10 の地域集団によって分割される。個々の地域集団は土地使用の単位であり、名づけられた聖地 (*akiriket*) で儀礼をおこなう単位となる集団であるとともに、ほかにたいして集団行動をとる単位でもある。ひとつの地域集団は 1 から 20 の集落により構成され、ひとつの集落には数十人から数百人が居住する。

本論で記述する集団間の紛争は、カラモジャの内外で生じているが、カリモジョンの場合、地域集団間の紛争がおこなわれる点がドドスとのおおきな差異となっている。この理由は不明だが、1980 年代以降に顕著になったと地元の住民は話している。カリモジョンの 10 の地域集団は旧植民地政府であった英国政府によって公式に認定され、それにおうじて新設された行政的な郡、ボコラ (Bokora)、マセニコ (Matheniko)、ピアン (Pian) によって 3 つに分割されている。カリモジョンの内部紛争は、このかつての 3 つの郡のあいだで生じている。²⁾ 表 1 に旧植民地政府が設定した郡の名前とそれに包含される地域集団の名前をしめしておく。

3. 自動ライフル銃と紛争の関係をめぐる議論

東アフリカ牧畜社会で研究をおこなった初期の人類学者たちは、牛略奪³⁾を一定のかぎられた便益を社会の内部にもたらず紛争と理解していた [Eaton 2008]。初期の民族誌は、民族アイデンティティの維持や若者による連帯、年長者による制裁や民族内部での略奪の禁止など、共同体内部の略奪紛争の機能や規律ただしさに注目していた。対照的に、1980 年代以降の文献は、商業化や自動ライフル銃の普及による伝統的秩序の解体を背景に、物理的暴力が暴走するさまを描出する。一例をあげれば、植民地期以前のタンザニア北部のクリア (Kuria) 社会では、牛略奪が「戦士の徳」を顕示し、家族の群れを拡大する役割をになう行為だったが、その後、植民地経済、資本主義の浸透、独立後の国家による圧力によって、不法で、暴力的で、現金経済へのつよい志向をおびた企図へと変化したとされている [Fleisher 2000, 2002]。⁴⁾

本論でももにとりあげるカリモジョンとドドスでの暴力紛争をめぐっては、まず、1950 年代に文化生態学的な関心をもってカリモジョンでフィールドワークをおこなったダイソン＝ハドソン [Dyson-Hudson 1966] の議論がある。彼は、民族内での家畜の窃盗には厳格な禁令

2) 2012 年現在、ボコラ郡はナバック県、ピアン郡はナカピリピリット県と行政区分と名前がかわった。だが、ボコラとピアンという単位は現在でも使用され、カリモジョン内部の紛争はボコラ、マセニコ、ピアンのあいだで生じていると語られる。

3) 牧畜社会での略奪では牛以外の牧畜家畜も対象となりうる。たとえばカリモジョンとドドスでは、山羊・羊群やラクダ群が略奪される。牛はほかの牧畜家畜とくらべ格段に、人間の統率によくしたがうし、歩行速度がはやい。ほかの牧畜家畜ではなく牛が略奪対象として選好される理由に関して、略奪経験者に質問してえられる答えは、ほかの家畜では逃げることがむずかしいというものである。

4) ボーリッヒ [Bollig 1990] もまた、東アフリカの国家主体の軍事化や銃の不法取引の広域化によって、近代武器の入手が容易になったことを、民族間紛争の激化の主因であるとのべたうえで、武器の所持にかかるコストが略奪の必要性をつくると指摘している。

が課せられている点を強調しながら、カリモジョンによる「ほかの部族」にたいする牛略奪が、政治的な決断をつうじてきびしい生態環境への適応としておこなわれるとのべている。だが、カリモジョンを対象にしてきた研究者たちはその後、ほかの東アフリカ牧畜民の略奪紛争を語る研究者とおなじ論調を採用するようになる [Mkutu 2008].⁵⁾ 内発的な抑制装置のそなわった平和な前植民地期アフリカは、近代世界との出会い、とりわけ資本主義と自動ライフル銃との出会いによりひきおこされたアノミーに直面し、現代のカラモジャの人びとにとって他者は自己の目的を達成するためのとりのぞくべき障害であり、利用すべき手段となったという論調である。

たとえばドゥームとブラッセンルート [Doom and Vlassenroot 1999] の指摘によると、カラモジャ地域の牧畜民に隣接する県に定住している西ナイロト系農耕民アチョリ (Acholi) は、カリモジョンやジエ、ドドスにより攻撃をうけ、しばしば国内避難民化してきた。彼らの社会にとって、牧畜民によってくりかえされる略奪は、国家が暴力を独占するという統治の鉄則を崩すものであると認識されている。さらに、ドゥームとブラッセンルートは、現代の辺境地域の紛争を、反目と略奪により特徴づけられているとみなすことに反対する。そしてカラモジャ牧畜社会の現代の武装化された略奪が、国家の軍隊の組織と戦略を模倣する新しい軍事技術と発想によって強化されているとのべている。また、ミルツェラーとヤング [Mirzeler and Young 2000] は、1980年代からの自動ライフル銃の一般化が人的犠牲を増大させた点を指摘し、年長者を中心とした合意にもとづく政治システムを機能不全におちいらせたと論じている。

牧畜社会の武器使用をとまなう紛争と略奪を記述・分析する、このようなアカデミックな視点の転換は、客観的な現実の世界の転換にそくしたものなのかどうか。まず、資本主義の浸透などの近代化の影響が紛争を悪化させたという議論については、本論ではとくにその真偽を検討しない。本論では、自動ライフル銃の普及が被害を拡大させたという見解について疑義を呈したい。すくなくともカリモジョンやドドスもその一部である東アフリカ牧畜民諸集団に関しては、自動ライフル銃の普及が、暴力的な略奪行為の直接的、間接的被害を拡大させたという見解について、その検証作業はいまだ十分になされたとはいえないというのが、本論の立場で

5) 『リフトバレーにおける銃とガヴァナンス』の著者ムクトゥ [Mkutu 2008] によると、東アフリカ牧畜民の集団間紛争の動機はかつて、牧草地や水など稀少な生態資源をめぐる競合だったという。敵への攻撃は年長者の統制下にあり、戦士は槍を使用していたため犠牲はちいさかった。しかし、20世紀初頭に中央政府による近代西欧に由来する統治手法がもちこまれると、植民地期から現代にいたるあいだに伝統的な生活は激変した。具体的には、外部からの行政システムの導入により年長者の権威は弱体化し、抑制に屈しないようになった若者は略奪行為に自由に参加するようになった。そして、家畜略奪を起点とする民族間関係の悪化しているまさにその時に、最悪のタイミングで自動ライフル銃が地域へ流入し、紛争被害は深刻なものになった。さらに、近年では商人や元軍人が牛略奪にくわり、集団間紛争は組織化された犯罪ネットワークへ包摂されつつある、というものである。

ある。この立場がもつづく根拠を三点、先行研究と筆者自身の調査の事例をまじえて指摘しよう。

第一に、自動ライフル銃の普及が牛略奪を残酷化してきているという見解への反証である。牧畜民サンプル (Samburu) が居住する北ケニアのマルサビット (Marsabit) では、暴力を原因とする死者数が 1940 年代にピークに達し、近年にいたってむしろ減少しているという事実が指摘されている [Dietz *et al.* 2005]。さらにその西隣に暮らす牧畜民トゥルカナ (Turkana) において、1929 年から 1983 年のあいだにおこった略奪犠牲は死者の数からみるかぎり深刻化してないことが確認されている [Oba 1992]。

自動ライフル銃の普及の前後における、カリモジョンの直接的被害と構造的影響を定量的に分析している二例の研究をみてみよう。ムクトウ [Mkutu 2008] は、ウガンダおよびケニアのリフトバレー地域の入院患者データから、銃撃による死傷者の数が 1996 年から 2004 年までの 9 年間で増加傾向をしめしていないと書いている。だがその後で、銃撃による死傷者が増加しているとも述べている。佐川 [2009] による適切な指摘のとおり、そもそも病院が提示するデータから死傷者数の増加をよみとることができたにせよ、9 年というスパンは被害の経年変化を断定するにはみじかすぎる。

カリモジョンにおける自動ライフル銃の普及と死亡率の変化の前後関係に注目したグレイたち [Gray *et al.* 2003] は、自動ライフル銃が、カリモジョンから困難な環境に対処する生物行動学的な適応力 (biobehavioral adaptability) をうばい、牧畜集団は絶滅にむかっているという結論をみちびきだした。1,000 人以上もの経産婦からの出生と死亡に関する系統だった聞きとりにもつづくその人口学的アプローチは、カリモジョンの破滅という主張を、完璧な証拠によって基礎づけているようにみえる。しかし注意ぶかくみれば、論拠となっているメインデータはその主張と齟齬をきたしている。なぜなら、インフォーマントの女性たちが共通して報告した死因は、感染症や栄養失調に関連するものであり、また、提示されたデータは、紛争の社会的な影響をもっとも敏感に反映する指標とされる乳幼児死亡率が減少していることをしめしている。ボコラの乳児死亡率は 1970 年代に最高値である 37 パーセントを記録し、その後 1980 年代に 24 パーセント、1990 年代には 11 パーセントに低下している。ボコラとマセニコの 5 歳未満と 10 歳未満死亡率はともに、1980 年代および 90 年代には、1960 年代の半分になった。また、略奪による成人男性の死亡率は 1950 年代の 22 パーセントから 1970 年代の 37 パーセントに上昇したが、自動ライフル銃が一般化した 1980 年代と 90 年代には 33 パーセントに下降している。かりにグレイたちのデータがじゅうぶん信頼できるにしても、牧畜集団の絶滅という主張と、牧畜民の牛略奪や銃所持との因果関係が証明されたと判定することはできない。

第二に、自動ライフル銃の一般化と暴力の深刻化に関して、槍から自動ライフル銃へという使用武器の変化と殺人にたいする感覚の変化の関連性は、それほど明確ではないように思われ

る。筆者自身の調査の事例を紹介しよう。それは、自動ライフル銃の普及によって、その使用者が殺人をおかすことをためらわなくなったという説明にたいして、疑問を呈するにたる内容である。

まず、ミルツェラーとヤングの説明はこうである [Mirzeler and Young 2000]。銃によって殺害された死者の魂は、槍で殺害された魂とはことなる。槍によって殺害された死者の魂はトロール (Toror) 山にひそんでいると考えられている。ここは古来から、カリモジョン、ジエ、ドドスなどカラモジャの牧畜民に、槍の穂先を供給しつづけてきたナイロート系農耕民ラボワール (Labwor) の郷里である。そしてその魂は、ブッシュから、殺人者にたいする報復をねらっているという。それにたいして弾丸で殺害された者の魂は、カラモジャの外部のどこかしらない場所へおくとみ込まれている。したがって弾丸は、犠牲者と殺人者の密接なむすびつきをたちきってしまうし、犠牲者の魂から解放される必要もない。だから、儀礼で浄化される必要もないし、その銃の使用をやめる必要もない。

しかし、カリモジョンやドドスの人びとと暮らし、直接話をしていて筆者は、殺人をおかす抵抗感がなくなったという上記の解釈とはまったく逆の説明がしばしばなされることに気づいた。つまり、おおくの攻撃者が銃を乱射して殺人がおかされた場合には、加害者が特定されないために死者の魂が除去されず、発砲者をいつまでもくしめるという語りを人びとの口から聞いた。また、ねらいをさだめて射撃して敵を殺害した場合には、照準のむこうの敵の姿が幾度も夢にでてくるとか、影が目にくるといった語りも聞かれた。殺人後の儀礼遂行がどのようになされるのかという点とともに、銃と槍の使用状況の詳細を丁寧に比較して、殺人者や関係者のふるまいを精査しないかぎり、殺人の感覚変化について断定的な見解を呈示することはできないように思われる。

そして最後に、銃をもつことによって紛争被害がすくなくなる事例もあることから、銃の一般化はかならずしも暴力の一般化につながらないと考えられる。1980年代から1990年代にかけてのエチオピア西南部のダサネッチ (Dassanetch) とニャンガトム (Nyangatom) の民族関係の動態にふれて佐川 [2011] は、敵対者による攻撃にさいなまれていた丸腰の民が、銃の獲得によって反撃に転じ、やがて双方が傷つくのをはたして、戦いを自制する気分を共有するにいたった流れを明らかにしている。

以上、自動ライフル銃が、無差別に暴力を行使するように社会を変容させてしまうのかどうか、銃殺されて亡くなった者の数や銃傷をうけた者の数、略奪された家畜の数、暴力紛争によって生じる社会不安の影響をうけやすい者の健康指標、自動ライフル銃を使って殺人を犯した者の認識、その破壊性に由来する暴力の相互抑止の効果についてみてきた。

同じ時代、同じ地域で生じた (生じている) 暴力紛争に関してさえ、たがいに対立しあう見

解がしめされている場合もある [佐川 2010].⁶⁾ 増田 [2005] は、西南エチオピアの戦いを介した民族関係を考察する文脈で、集合的な武装暴力を考察するにあたっては、分析者の世界観が影響すると指摘している。

東アフリカ、そしてカラモジャにおける略奪と暴力紛争をめぐる観点の変化の理由については、1980年代に経済・社会的アノミーを基軸として台頭してきたアフリカ悲観論（アフロ・ペシミズム）[Anderson 1986; Eaton 2008] と、1980年代後半以降の牧畜研究の焦点が、特定の環境条件の内部での牧畜の成立機構から、政治経済的な変化と政府や開発組織への牧民の対処へと移行した [Mullin 1999] ことに影響された結果と考えることもできるかもしれない。筆者はすくなくとも、「自動ライフル銃の普及はカラモジャ牧畜社会を無秩序化する」ということは、未証明段階にとどまっていると考えている。

ところでここで、紛争がなぜ発生したのかを単純化してとらえる思考には危険があることにも留意しておきたい。イートン [Eaton 2008] は、紛争の解決をミッションにすえる幾多の開発援助組織が、その真摯な努力にもかかわらず挫折をくりかえしており、紛争の「根本原因」の同定とその除去を追い求める発想と実践をやめないかぎり、いつまでもおなじ失敗をしてしまうだろうと書いている。曾我 [2007] は、ソマリア・ナショナリズムを脱政治化したイギリス国営放送（BBC）をめぐる研究をあらわしているが、そこでは、マスメディアによる紛争発生要因に関するステレオタイプの新生産過程がえぐりだされている。また、ストレイト [Straight 2009] は、サンプルに関して「牛略奪紛争で落命する牧畜文化集団である」という文化的ステレオタイプを流布するメディアによる表象が、日々くりかえされる LIC から時間性や政治性を脱色していること、地元出身の国会議員や地方政治家などの政治エリートの過失や経済的・政治的権益をおおいかくし、社会の周縁化を促進してしまうことを指摘している。アフリカにおける民族紛争の動態を資源紛争との関連から考察し、資源の稀少性を紛争の根本原因におく現代紛争イデオロギーの席捲をみぬいている藤本 [2010] は、きまり文句的な紛争説明は、紛争の解決や予防への努力をミスリードするだけでなく、新たな紛争の火種となる危険さえふくんでいると指摘している。

本論は、これらの疑義の声に呼応して、紛争の発生原因を「資源の稀少性」や「文化的な固有性」、そして「自動ライフル銃の一般化」などに還元する思潮にたいしては批判的な立場にたつものである。なぜならば、ファーマー [2011] のいうように、集団間の文化的敵意や自

6) 自動ライフル銃の導入が社会の秩序系に劇的な変化をもたらすという、人間社会の技術決定論の思考の根については、すくなくとも 18 世紀まではたどることができる。レステル [2009] によると、道具使用は 18 世紀における人間学で注目されてからというもの、人間性の重要な属性とみなされ、人間と動物を区分する境界線をつくる役割をはたしてきた。石や枝、棒などは、類人猿にとっての不可欠の道具とされ、ルクレティウスやヴォルテールはそのうちの石を最初の武器とみなしている。その後も道具はじつにしばしば武器として使用されてきたと考えられてきた。

然資源の経済的競合などに、紛争の根本原因を本質化させてとらえてしまうと、歴史的・経済的な状況によって重層的に規定されるソーシャル・サファリングがおおいかくされてしまう危険がでてくるからだ。

以下では、紛争をめぐる議論の歴史的な変化によりかかって「分析」をすすめるのではなく、また、あたらしい根本原因やすでに指摘されてきた原因の相互的な配列を検討するのではない。むしろ、カラモジャの現地住民が、本質的に相容れることのできない異他的な存在として政治・行政・軍によって他者化されている武装解除政策のもとの対象社会の内実にわけりたい。そして、人びとの日常的な生活の感覚や論理を理解することを重視してゆくために具体的な作業として、銃がどのような歴史過程でどこから流入してきたのか（第4節）、現在、人びとは銃にどのような価値を付与しながら利用しているのか（第5節）、銃が一般化した状況にたいして政府がいかなる武装解除の介入を試み、それにたいして地域住民はどのように対応しているのか（第6節）を記述してゆこう。

4. 自動ライフル銃の一般化

ケニア、ウガンダ、スーダン、エチオピアに居住する東ナイロート語系諸民族カリモジョン、ジエ、ドドス、トボサ (Toposa)、トゥルカナ、ニャンガトムなどによって銃は、アトム (*atom*) という語でよばれる。それは銃の流入の初期の記憶を正確に刻印している。⁷⁾ この語は、エトム (*etom*) すなわち「象」と語幹を共有する。銃は、19世紀後半から20世紀初頭にこの地に象牙を目的としてやってきた、エチオピア人、イギリス人、アメリカ人、アラブ人、スワヒリ人からあたえられた。つまり、東ナイロート系の牧畜民に象牙の報酬として交換され、あるいは象を効率的に狩猟する道具として銃が供給された。⁸⁾ カリモジョンとドドスのオーラルヒストリーによると、銃、とくに自動ライフル銃の流入以前、カラモジャの暴力紛争で使用される武器は、ウガンダ国内に居住する西ナイロート系の近隣農耕民ランゴ (Lango) や南スーダンのローディン (Loodin) に居住する西ナイロート系農耕民アチョリが精錬した鉄製の諸刃の穂を先端に取り付けた槍を主体としていた。ウガンダ首相官邸が防衛省の協力をえて2007年に改訂した報告書『カラモジャの人間の安全保障と回復の推進のための基盤整備

7) カリモジョンの地域集団のひとつであるンギトメ (*Ngitome*) は「象の人びと」という意味であるが、彼らの居住地ロトメ (*Lotome*) の中心地にもっとも近い集落に居住する長老は、「ロトメの牛のはじまりは象牙である。ケニアのバリゴ (*Balingo*) で象牙をわたし、牛をうけとった。象牙はバリゴからアジスアベバ (*Addis Ababa*) に運ばれた。ロトメの名前の由来は、象牙を狩るための場所という意味だ」と語る。

8) ウガンダでは1894年に英国保護領となった後、カラモジャの象牙をめざして、象牙商人がこの地に進出した [Mamdani *et al.* 1992]。現地住民は象牙狩りにくわり、報酬として牛をうけとったが、やがて象の生息数の世界的な減少により象牙価格が高騰し、商人間の競争はきびしくなった。カラモジャの牧畜民に銃があたえられたのはちょうどこの時代である。銃は象牙のために象を狩猟する道具として、あるいはまた、狩猟への支払いとしての牛の代替となる価値ある報酬としてあたえられたのである。

2007 年-2010 年』[Office of the Prime Minister 2007] によると、1961 年から 62 年に植民地政府が、ウガンダの多数民族であるバンツ系農耕民のガンダ (Ganda) を主力にした特別準憲兵部隊を組織して、最初の武装解除を実施した。これは、カリモジョンやドドスの人びとに「槍の季節 (*ekaru a mukuki*)」⁹⁾ とよばれる。¹⁰⁾ 押収の対象が槍であったからである。

1970 年代以前は、カラモジャで使用されていたのは、カリモジョンやドドスで *amicir* (pl. *ngamiciro*) とよばれる、細長い砲身が特徴の火縄式の銃であった。火縄式の銃は 1 回発砲しては、槍を手に逆襲してくる敵からにげながら次の弾を装填しなければならない点で、遊撃戦には不向きである。そのため、カラモジャにおける銃の使用が一般化するまでにはいたらなかった。¹¹⁾

1970 年代後半以降、自動ライフル銃はまず、カラモジャに隣接するスーダン南部から交換をつうじて流入しはじめ、次にカラモジャの内部のモロトの軍事基地の武器庫からの略奪をつうじて一般化した。以下の事例は、北カラモジャのドドスの男性 (ロニヤ) が、第一次内戦を経たスーダン南部の集落において、その住民である東ナイロート系牧畜民トボサから自動ライフル銃をえた例である。

【事例 1】

ロニヤは 1976 年 5 月に、カウワラコル (Kawalakol) 地区のナポティポット (Napotipot) にかまえていた家畜キャンプでトボサによって約 200 頭の牛を略奪され、クラン・メンバーである友人のケイヨ、そして東スーダン語派スルマ系農牧民ディディング (Didinga) である友人のガピトとロクトとともに、カポエタ (Kapoeta) へ奪還の旅にでた。カポエタ行きを提案したのは、ディディングの 2 人だった。カポエタはおおくのトボサの居住する町で

9) 日常生活の会話のなかでくりかえし語られ、想起され、構築される歴史には、人びと自身が特定の時代の推移や出来事を、どのように受容し、現在化しているかという問いにたいする手がかりがふくまれている。グレゴリウス暦での編年史をもたないカリモジョンやドドスは過去を想起し、表現するさい、対面する他者が了解できる出来事に「季節」を意味する *ekaru* を付与する方法で特定の事象が生じた「時」を指示する。対面する相手と話者が同一世帯の成員なら「～という名の家畜が生まれた (季節)」というマイクロレベルの出来事でも情報はつたわりますが、外部の者とコミュニケーションするためには、よりポピュラーな出来事を相互参照する必要がある。「彗星がながれた (季節)」「～という場所で旱魃がおきた (季節)」などであり、ひとつの「季節」は、一瞬の出来事 (たとえば彗星) とともに、数年におよぶ長期化した出来事 (たとえば飢饉) を参照する。本論では、人びとが参照する出来事の抜粋を時系列で並列したリストを出来事暦とよぶ。

10) 1955 年にカリモジョンは近隣農耕民のテソ (Teso) を攻撃して、22 人を殺害し、2,000 頭の牛を略奪した後、いくつかの大規模な攻撃を国境をこえておこなった。これが「槍の季節」のきっかけとなった [Office of the Prime Minister 2007]。

11) カラモジャでの銃は植民地期の象牙狩りに源流があり、その後 1970 年以降内戦下のスーダンから流入している。1950 年代ケニアの独立をめざす武装闘争勢力や北部辺境地区の分離独立派から多数の銃が流入してきたとの指摘がなされることがある [たとえば Mburu 2003] が、現存する銃にしめる割合はちいさい。むしろ、1980 年以降の自動ライフル銃の普及が顕著である。これは 1979 年に内戦で敗北したアミンの軍隊が放棄した軍事基地から銃がもちだされた事件の直後である。

あり、2人にはカポエタにトポサの友人がいたからだ。カポエタでは、ガピトとロクトの導きをつうじて、チーフをつとめるトポサのイイコと会い、彼が現地の警察にひきあわせた。警察はロニヤの家畜を盗んだ人間の住む集落をさぐりあて、ロニヤはすべての家畜をとりもどすことができた。ロニヤは去勢牛をイイコに1頭あたえた。そして、イイコの紹介で出会ったアニピニャンと意気投合し、ロニヤは彼の集落に暮らした。滞在中にアニピニャンはロニヤに「銃を手に入れ、家畜と交換するとよい。ドドスは銃をもっておらず、略奪から守るためにも、また略奪するにもよい」といった。ロニヤはアニピニャンからトポサの人びとを紹介してもらい、1丁あたり牛11頭から13頭の交換で合計7丁の銃を入手した。帰郷後、そのうち4丁をカーボンとカラパタ（Kalapata）に居住する4人の男性に1丁ずつ、1丁あたり牛15頭から20頭で交換した。残りの3丁の銃は、合同で放牧群をつくっていた第二夫人の兄、異母兄弟、ロニヤの牛を放牧していた牧夫にあたえた。

ロニヤにとっては最初で最後のこの銃取引は、カラパタでの自動ライフル銃の流通の開始であると、現在カラパタに居住する長老たちは語る。ドドスの隣接集団間関係を分析した河合[2004, 2009]がくりかえし指摘するように、東ナイロート系のカラモジャ牧畜諸社会においては、テリトリーと境界の概念があいまいであるのみならず、集団間で高揚した緊張は、それを顧慮しない個人間の往来や贈与によってときほぐされ、近代戦ではおなじみの全面対決の様相を呈しにくい [Hazama 2010]。カラモジャに自動ライフル銃が普及しはじめた時点では、うへの事例にみられるように、個人的な紐帯をつうじて、敵対集団から銃が供給された。

銃が一般の人びとに日常的に所持され、カラモジャ全域の牧畜生活にとって不可欠の道具になるのは、1970年代後半、モロトの軍事基地の武器庫からの銃の大量略奪以降のことである。モロトの武器庫の銃は、イディ・アミン政権において、「領国土内の辺縁地域を平定する国家的努力の最終標的」[Mamdani *et al.* 1992]としてのカラモジャにたいしてもちいるために、暴力の道具としてもちこまれ、保管されていたものであった。1978年のタンザニア侵攻の失敗の後、79年に政権が打倒され、モロト山の北西麓に配置された国軍軍事基地が放棄されると、カリモジョンの三大地域集団のひとつ、マセニコが銃をもちだした。北ピアンのカリモジョンの年長男性は、このときロバの背の上につままれてはこばれる銃の束が薪の束にみえたと同想している。

2008年7月モロト県ボコラ郡で筆者が実施した、郡内の半定住集落に居住する成人男性によって所持されている全214丁の銃のタイプとそれを獲得した年に関するアドリブ・サンプリングによると、1979年以前に獲得した銃の数が1年あたり0.6丁にたいして、80年代以降は6.5丁へと上昇し、とくにカラシニコフ銃とG3といった自動ライフル銃の獲得が顕著であることがわかった（所持されている自動ライフル銃の種類については表2を参照）。80年以降

表 2 ボコラで確認された自動ライフル銃の種類

1. *Amatida* とよばれる銃は水道管などの金属パイプから製造し、火薬を使用したショットガン方式をとる最古の銃である。22 丁を確認したが、*abicir* と *logelegel* によびわけられ、照準を欠く後者はより古いタイプとされる。
2. アフトマト・カラシニコフ (Avtomat Kalashnikov) 銃ないしその複製は *amakana* とよばれる。調査で確認した 65 丁は 10 種 [*aceger*, *akeju-asuulu* (ないし *akeju-batat*), *asili-reng*, *apas*, *amerikeju*, *ayesengor*, *nakasongola*, *atodobokakilegit* (ないし *aritongit*), *akwapenek*, *ariamakor*] に下位区分される。*Atodobokakilegit* と *akwapenek* には銃剣 (*ekileng*) の取り付けが可能である。*Atodobokakilegit* は照星が円環 (*todo* は円環状に矯正された牛の角を意味する) であり、その木製の銃床の色はベージュ (*bok*) である。長もちするうえにキックバックが小さいカラシニコフ銃は人気が高いが、製造地である中央ウガンダの県名に由来する *nakasongola* は摩擦熱により「首」(=銃身) が溶けるため連射の利かない粗悪品とされる。
3. G3 は *aliba* とよばれる。*Aliba* は小さな明るい緑色のハタオリドリを意味する。ケニアの警察官が典型的に使用するタイプの銃であり、ドイツ、フランス、イスラエル製など 42 丁が確認された。
4. G2 は *eleponbong* とよばれる。5 丁の G2 が確認された。銃名の部分 *lep* に「搾乳する (*akilep*)」の語幹をとる語の構成は「牝牛から乳が出てくるようになめらかに銃弾が飛び出してくる」さまへの注目の痕跡を示す。
5. コンパクトな箱型の外貌が特徴的なウージー銃は、カリモジョンが「飢え」とよび、ドドスが「一掃」とよぶ 1980 年東アフリカ一帯を襲った大旱魃時に配給された 3 リットルオイル缶 *eitabui* と同じ名前前でよばれる。*Acaca* と *loringirin* の 2 種 6 丁が確認された。
6. 軽機関銃は *acoronga* と *narikot* に分類される。35 丁が確認された。後者は瞬時のうちに「弾丸の鎖 (*erikot*) を飲み込む」と評される。
7. 自己装填ライフルは *epian* と総称される。発射音が雷鳴 (*ngipian*) に類似する。確認された 29 丁は *locicuwa*, *lokirion*, *nato*, *akosowan*, *elekejen* に下位区分される。
8. 自動歩槍銃は *apeledeng* とよばれ、*acaineeth*, *agurigur*, *agorogoro*, *aparipar* に下位区分される。10 丁を確認した。ウガンダ人民防衛軍が祭典時の行軍で使用する *acaineeth* は「銃口が中国人 (*caineeth*) の目のように小さい」ためにそうよばれる。

に獲得した銃の数の増加は、1979 年に県の中心モロトの兵舎内に配置された武器庫からマセニコにより略奪された銃の、隣接する地域集団ボコラへの流入を示唆しているとみなしうる [Hazama 2009]。この調査で確認された銃の 9 割近くが自動ライフル銃であった。

現代の銃の獲得方法の特徴として二点指摘できる。第一に、カリモジョンやドドスでは家畜を介した銃の獲得がもっとも一般的であり、現金による購入はきわめてまれである。¹²⁾ たとえば、カリモジョンのロトメで 1999 年 2 月と 2005 年 2 月におこなった、34 丁の銃の入手経緯の聞きとりによると、16 丁は家畜との交換により獲得したものである。銃の購入には一般に牝牛を使用し、まれに去勢牛や小型家畜を付加していた。¹³⁾ 現金を介して購入されたのは 1 丁のみであり、それは牝牛 1 頭に現金 (1 万 5 千ウガンダシリング) をくみあわせた支払いであった。¹⁴⁾ 第二におおかつたのは、治安維持のために国が配備した部隊などからえられた銃である。具体的には、陸軍特殊部隊である反家畜窃盗部隊 (Anti-Stock-Theft-Unit : ASTU) や

12) 西南部エチオピアに居住するオモ系農牧民バンナ (Banna) における銃の獲得での支払いは、かつては牛などの家畜でなされていたが、現在は現金による購入が主流となっている [増田 2001]。

地域歩兵隊（Local Defence Unit:LDU）といった治安部隊から、支払いの遅延する給料のかわりとして、また防衛手段として支給されたもの（10丁）だった。賃金未払いやきびしい軍事規律により入隊者のおおくが離脱して隊員の補充が困難になっていたため、隊員をひきとどめるための銃の支払いが常態化していた。¹⁵⁾

【事例 2】

2003年にASTUのキャンプ地で1ヵ月の訓練をうけたアパーロウニャは、防衛のためのカラシニコフ銃を指揮官からうけとった。1年後にウガンダ国軍（ウガンダ人民防衛軍）への加入をすすめられたが、予定された駐屯地は故郷から非常にとおいように思えたし、また給料支払いの頻繁な遅延の不満もあって、「昇進」の打診には魅力を感じなかった。その日の深夜キャンプをぬけだし、1週間かけて徒歩でロトメにもどってきた。「みんながそうする」ように、銃はもってかえてきた。¹⁶⁾

賃金の欠落の補完としてでさえも、それは法的正当性を欠いて付与された銃である。現地に駐屯する軍の指揮官は慣例的に黙認する場合がおおいが、つねに黙認するわけではない。通報

-
- 13) これらの購入された銃はすべて、ボコラ南部のピアンとの無人の境界地域の草地にたてられた草葎の小屋で銃取引に特化した商人から入手していた。銃弾は、2002年から2006年にかけてAK47の銃弾1個あたり500リングであった。モロシヤトウジンビエなどの雑穀醸造酒1杯（約2リットル）と弾丸の取引は、給与支払いがどこおりがちで現金をもたない中央政府に雇用された兵士と、地酒をうる既婚女性とのあいだでさかんにおこなわれていた。女性が所有する穀倉（*edura*：人の身長の高さほどの、おおきな籠）のなかには、穀物の粒（穂を脱穀して、風選した後にのこる種子）や紙幣、貨幣とともに、大人の中指ほどの銃弾が数発ずつはいつていた。醸造酒という「飲物」だけでなく、製粉されたソルガムやトウジンビエの粉、牛や山羊のミルク、屠殺された家畜の肉など食物を銃弾との交換で購入したり、病気やけがの治療費として手当てをしてくれた在野の医療者（*emuron*）に支払ったり、物乞いへの喜捨として贈与するやりとりもみられた。おおくの社会で武器を保持することには重要な文化的意味があり、若い男性の成人儀礼などのさまざまな社会的儀礼のなかにおこまれている。そのような社会では女性の本来の役割は武器の所有をささえるというものである。銃の所持の一般化における女性の文化的役割はめったに言及されることがないが、カリモジョン社会では、男が戦闘へ旅立つときに祝福し、出産によって兵力を増強する役割をになう女性は戦争準備のための不可欠の部分であるとみなされ、また略奪の成功は家族集団の経済事情を好転させるため、男性に銃をつかって家畜略奪にくわわるよう奨励することに女性は大変熱心である。女性による略奪の奨励が銃の獲得を間接的にうながしたと考えることはできる。しかし同時に、略奪には家族の男性成員の死亡というリスクをとまなう。とくに男性は父系親族とともに略奪を実行することがおおく、同一親族集団の複数の男性成員を同時にうしないかねない。
- 14) 銃の種類におうじた変異や時間的変動はあるが、1999年から2008年までは、3頭の牝牛にたいしてカラシニコフ銃1丁という交換レートはほぼ安定していた。
- 15) 本文に記した家畜との交換（16丁）や軍からの支給（10丁）以外の獲得方法としては、贈与（6丁）、父親からの移譲（1丁）、殺害した敵からの略奪（1丁）があった。贈与の内訳は、母方オジから（2丁）、兄弟から（2丁：兄から1丁、弟から1丁）、母方従兄から（2丁）となっている。贈与の背景を聞きとりえた4丁のうち、2丁は銃の授与者自身が所有している家畜群の放牧をおこなっている牧夫にたいし、その家畜群を守護するためにあたえたものである。さらに、すでに略奪戦で殺害した敵からうばった銃を、すでに別の銃をもっていた弟が兄にあたえたもの、そして反家畜窃盗部隊から支給された男性がその銃を部隊から集落にもどった直後に甥にあたえたものが、それぞれ1丁ずつとなっている。

がなされ、銃をとりもどすための軍事行動がひきおこされることもありうる。たとえば 2005 年 1 月、筆者はロトメで白い山羊皮が大樹 (edurukoit: *Acacia albida* Del.) に巻きつけられるのを見た。これは、その大樹の樹冠が北で接する集落に住む男が、前年 4 月に陸軍の駐屯地から銃 1 丁をもち帰ってきたことにたいし、在留国軍が包囲捜索強襲¹⁷⁾をかけてくるのをふせぐための結界であると説明され、サンダル占いの結果として古い師が指定した敵の撃退方法とのことであった。このように、合法的に銃を所持していることをしめす公文書が存在しないため、供与された銃もまた武装解除の政策下では政府の意向次第でいつでも「違法銃」と定義づけられ、徴発対象になる。結界としての山羊皮は、気まぐれな暴力への恐怖の表徴と解釈できる。

トーマス [Thomas 1965], ダイソン=ハドソン [Dyson-Hudson 1966], ゴーレイ [Gourlay 1971], ノベリ [Novelli 1988], ナイトン [Knighton 2005] など、1950 年代から 2000 年代にかけてカラモジャで現地調査を実施してきた人類学者や宗教学者は、人びとの牧畜生活の大半が領域内で入手した資源を利用して成立しており、彼らが伝統的な社会、政治、文化規範を固守してきたとのべている。たしかにカリモジョンやドドスの人びとは辺境地域に居住し、自給自足的な生活をいとなんできた。しかしながら、彼らは、外部からえられた銃を略奪や支給、そして贈与によって入手してきた。正確には、隣国および自国の国家的統治の消失時点において、自己にたいして時に暴力的に敵対する主体、すなわち隣接他集団や国家が、自動ライフル銃の主要な供給者としてたちあらわれてくるのであった。

5. 銃の所持と使用

銃や銃弾の積極的価値は、略奪と交換をめぐる表出する。銃所持者が語るもっとも一般的な銃の所持理由は、敵からの「家畜ないし人間の防衛」である。牛略奪の暴力は、家畜の喪失による、アイデンティティへの脅威である。牛をもたない状態にいることは、ブリスタッド [Blystad 1999] がタンザニアのダトーガに関してのべているように「なにものももたない人物であること」で、「なにものももたない人物であることに関連する苦痛は日常会話の焦点となっている」。あるカリモジョンの牧民がのべるように、「(家畜における) 豊かさは生であり、

16) 家畜略奪の統制は ASTU にまかされていた。それは、2004 年までは略奪集団からの防衛のために支給されていた銃で武装した自警団とともに活動していたが、それ以降は LDU として再編され、陸軍の統制下におかれた。ただし創設にかかわる法的な根拠があいまいで、誰が責任説明をおっているのが不明確である LDU の存在それ自体が武器問題を悪化させていた。ASTU の隊員にたいしては警察、軍、長老のすべてが指示をだすことができた。しかしカリモジョンやドドスの男性たちは、家長や地域集団のリーダーなど日常生活をともにしたり、密接に連絡をとりあっている人びとの意思にたいして迅速に反応することになれているが、忠誠心をいだいていない抽象的な指揮系統の連鎖をおりてくる命令をまつといったことには不慣れであった。そのため彼らはしばしば銃を使用し、防衛だけでなく、銃や銃弾を略奪してうるための攻撃にも参加した。

17) 包囲捜索強襲 (cordon-and-search) は基本的な反乱鎮圧作戦であり、特定の地域に非常線をはって武器や「反乱者」を捜査する軍事作戦である。

貧しさは死のようなものである」。カリモジョンとドドスの社会では、家畜の喪失は男性の自殺をひきおこすものとして知られている。東アフリカ牧畜社会において個人の家畜を喪失することは自己や家族がほろびることとおなじことであり、人間であることの喪失であり、アイデンティティの喪失でもある [Broch-Due 2000]。

銃は模擬戦（カリモジョン語：*akidam*／ドドス語：*akidamidam*）でも使用される。模擬戦は自身の家畜群にたいする略奪リスクがたかいたと思われるとき、とくに放牧に出発する直前に、長老の演説¹⁸⁾を中核とする、青年たちの士気を鼓舞する（「体を熱くする」）集会（*eperit*）の後におこなわれる。

模擬戦では、胸に銃を抱いた青年たちが速足で“dam”という擬音語であらわされる足音をたて、蛇行をくりかえしながら円をえがいて歩く。2, 3人ずつ、蛇行の途中で静止しては、銃口を実際にはいない敵へむけて照準をさだめ、発砲する。そのあいだ、男たちは歌を合唱しつづける。模擬戦の後、おこりうる不幸やまもりをかためるべき場所と、次回の儀式で屠殺されるべき家畜の体色などが予告される「腸占い」をおこなう。占いにつづいて、屠殺された家畜の肉が共食される。その後、家畜群は放牧へでかけるのだが、長老の演説から肉の共食までのプロセスの全体が敵を撃退するためにおこなう儀式である。銃を所持していること自体、ないしそれをディスプレイすることにも意味がある。また、放牧に銃を携行して家畜群に随行し、群れから一部の個体をかすめとろうと狙う敵の実行を抑止する。さらにその結果として、

18) 2003年7月3日夜半、トゥルカナによるレイディング未遂後、家畜キャンプを構成する放牧群の所有者であるドドスの長老は、以下の内容で演説した…「おまえたちはこれまで家畜をうしなってきた。牛は人間によってまもられるべきだ。われわれは牛とともにいなければならない。子どもにパトロールを先回りしておこなうように命じるときには、われわれは群れとともにいて、そして群れの後方から牛をおわねばならない。子どもたちは群れの前方でトゥルカナに対処する。われわれと一緒にいて、牛になにか悪いことが生じうるだろうか。半定住集落にいてどうなるというのか。こういうふうにしななければ、敵は前方からとんでくる。半定住集落とはなんだろうか。半定住集落のものはなくなりはない。ロカペルンゴレ（人名）よ、半定住集落のものとはなんだ。家畜キャンプは牢獄ではないのだ。われわれは家畜キャンプで寝る。半定住集落ですごしたいのなら、そうするがよい。だが、牛を（われわれのすべての牛群が壊滅した）ロキテラアレガン（でおきた略奪）の二の舞にはするなよ。おまえは、ロキテラアレガンの時のように敵に自分の牛を発見されてしまうだろう。なぜ牛とともにいようとししないのか。飢餓がきたときに、死なないものがあるだろうか。なにを毎回おそわっているのだろうか。なにもきこえていないのだ。ドドスよ、牛を閉めよ（牛群にたいする警戒を解いてはならない）、人びとよ、牛をまもれ。この子どもたちは、牛をまもり、敵をころすであろうか。どうやってころすであろうか。子どもたちが銃をもっていると知っているにせよ、けっして『子どもたちが牛をすくってくれる』などといってはならぬ。アパロテレ（人名）よ、自分で牛をまもれ。おまえの子どもは牛とともにあるだろう。おまえは、おまえのキョウダイと家畜キャンプにいることに、問題でもあるのか。銃をもつ者は牛と寝て、これをまもるべきである。なにをごちゃごちゃいっておるのだ。たち枯れて腹の足しにもならない灰色の草(*asakatan*)のようにたくさんいる敵に、いったい、ひとりで太刀打ちできるとでもいうのか。もう一度いおう。われわれは10~20人でいなければならない。昼間に敵がやってきて、それと対峙した時、一方の人びとははしり、そして発砲せよ。他方の人びとは牛を追ってつれもどせ。同時に、敵との戦いと牛追いをおこなうのが可能だろうか。われわれはつねに敵と戦っている。われわれ男は、10~20人でなければならない。それぞれの囲いで、10~20人でなければならない。『(たすけてくれる)モノがある』などというな。われわれは牛とともに多数であらねばならない。」(筆者自身による聞きとり)



写真 1 1998 年 11 月、筆者のコンパウンドでの記念撮影

武装解除以前、青年たちは所持している銃を誇示した。銃の使用の仕方は銃をまなざす視線のあり方と密接に関連する。1998 年は銃を携行する牧民の姿をカラモジャのいたるところで目にした。街中やメインロードを闊歩する青年は肩から銃口を上にした銃を銃帯で吊っていたし、発砲も頻繁におこなわれていた。ところが、カラモジャでの武装解除の開始以降、ダンス・パーティの場や路上で銃をもつ男性たちは姿を消した。

牧童は敵が襲撃してきても応戦することができるという安心のもとに群れを管理できることになる (写真 1)。¹⁹⁾

カリモジョンの人びとは、自分が放牧で随行する家畜の名前をもりこんだ歌をつくる [Hazama 2012] が、銃はこのような持ち歌の一般的なモチーフになっている。一例をあげよう。放牧の場をきわめて素朴に描写している、1998 年当時に 12 歳であった牧童のつくった歌がある。それは場所 (「ロムリアコリ」)、去勢牛 (「黄色い奴」)、そして歌手の兄 (「ロキル」) に言及する…

「いって草を食め、ロムリアコリで／いつもロキルの銃がある／いって草を食め、ロムリアコリで／ロキルの銃がある／いって草を食め、ロムリアコリで／黄色い奴はふとってきた／いつもロキルの銃がある」(ロメール・イクワナヴォ；1998 年 2 月作詞作曲)

「太陽がわたしたちをロムリアコリでまぜあわせる」とカリモジョンがいうように、通常の放牧で使用されるサヴェンナが早魃に見舞われた時でさえ、ゆたかな牧草と水にめぐまれるピシナ湖水域内の放牧地ロムリアコリは、とりわけ乾燥のきびしい季節にカラモジャ全域から

19) 銃は敵との戦いで使用するほか、多様な用途がある。ホロホロチョウ (*atapem*) やディクディク (*esiro*) を対象とした銃猟や、結婚式や饗宴での祝砲、そして青年たちが跳躍のダンス・パーティに銃を携行するのは、男らしさ (*ekileenu*) の標徴としてである。

やってきた牛群キャンプが集中的に設営される場所であり、それゆえ家畜をめぐる略奪と暴力のアリーナとなっている。この曲は、「兄」の携行する「銃」が「黄色い去勢牛」とたえず道行きをとにもする潜在的な戦場から着想をえている。今日の放牧地の心象には、牛と仲間と銃がふくまれ、それらの存在によってはじめて最乾季の家畜の生存を保障する牧草のある放牧地で牛の肥育が可能となる。聞き手は「草を食む (*adaka*)」と「銃 (*atom*)」という反復される声をとおして、そのような認識を歌手と共有することになる。

略奪は、カラモジャの牧民にとって家畜入手の主要な手段となっている。そして現代の略奪は、銃の存在によってはじめて可能となる。筆者は、ドドスの家族 A と家族 B の 2 家族から、所有している家畜群の入手経緯に関する聞きとりをおこなった。表 3 より、家族 A の家畜群では、略奪への直接参加でえた個体の数は牛、山羊ともに、出生でえられた個体数についておおく、家族 B の所有群では、家族 A と同様に群れの内部で誕生した個体が最多であるが、略奪により獲得した個体数は、婚資として贈与された個体についておおいことがわかる。

家族 A の牛群のうち、53 頭はジエとトゥルカナからうばってきたもので、1999 年 3 月、2002 年 7 月の 2 回の略奪でジエから 31 頭を獲得し、トゥルカナからは 1996 年 10 月、2001 年 3 月、2001 年 7 月、2002 年 8 月の 4 回の略奪で 6 頭をえている。このほか、ジエから 4 頭とトゥルカナから 12 頭の略奪個体がふくまれているが、それらの略奪時期は不明である。35

表 3 ドドスの 2 家族が管理する家畜群の入手方法 (2003 年 3 月)

入手方法	家族 A				家族 B	
	牛群		山羊群		牛群	
	(頭)		(頭)		(頭)	
出生 (<i>apeitun</i>)	81	39.1%	128	64.6%	56	48.3%
略奪 (<i>arem</i>)*	53	25.6%	35	17.7%	12	10.3%
信託 (<i>akijok</i>)**	24	11.6%	2	1.0%	18	15.5%
購入 (<i>agyelun</i>)	16	7.7%	4	2.0%	0	0.0%
婚資の贈与 (<i>akuutun</i>)	13	6.3%	4	2.0%	18	15.5%
債務の支払い (<i>akitac</i>)	7	3.4%	11	5.6%	5	4.3%
贈与 (<i>amekin</i>)	6	2.9%	10	5.1%	1	0.9%
交換 (<i>akisiec</i>)	5	2.4%	0	0.0%	6	5.2%
迷子の捕獲 (<i>akirapun</i>)	2	1.0%	3	1.5%	0	0.0%
略奪の分配 (<i>akidier</i>)	0	0.0%	1	0.5%	0	0.0%
計	207	100.0%	198	100.0%	116	100.0%

* 略奪という手段で家畜をえるには、みずから参与した略奪でえた個体を略奪者集団 (*ngikaracuna*) のあいだで分配してうけとる場合と、自分は集落にとどまっていたが帰還した略奪者から分配をうける場合とがある。ドドスはこれらを明確に区別しており、前者を *arem*、後者を *akidier* とよびわけている。*Akidier* は親しい友人や親族のほか、略奪の成功や敵の調伏を祈念して聖なる土 (*emunyen*) を略奪者の身体に塗布し祝福をあたえ、戦いの最中にも祈りをつづける長老や占い師も分配の重要な対象者である。

** 信託している個体にたいして、受託側は所有権をもたない。

頭の山羊は 2002 年 2 月にトゥルカナにたいしておこなった 1 回の略奪でえたものである。また、家族 B の牛群にふくまれる個体 12 頭は、2001 年から 2002 年にかけて 3 回のジェにたいする略奪をつうじて獲得したものである。

略奪して数年が経過してもなお、その略奪した個体を群れの内部にとどめる傾向は、牛略奪ビジネスに数十年にわたって関与し、牛の売却をとおしての現金獲得に略奪目的を限定しているタンザニア北部のクリアの実践とは明瞭な差異をなしている [Fleisher 1999: 241]。カラモジャの牛略奪は共同体の活動から商業的な利益をえる個人的な活動へ変化した [Knutsson 1985; Ocan 1994; Mirzeler and Young 2000; Sundal 2002; Stites *et al.* 2007] といわれるが、ドドスの人びとは政府や軍による捜索がなされなければ、自分たちが略奪した個体もなるべくうらずに手元にのこしておきたいという希望をもっており、²⁰⁾ 実際の所有家畜群は、財産を家畜というかたちで保持する欲求が反映した構造をとっている（ドドスにおける 2 家族が管理する家畜群の構成については表 3 を参照）。²¹⁾ ドドスでは、略奪した家畜を売却することによって「商業的な利益をえる活動」は、商品交換の原理が支配的な家畜マーケットに近接することによって自動的に開始されるものではない。それは、むしろ、国家が遂行する法執行活動と間合いをはかりながらなされている。軍事的な力の行使をともなう略奪行為の取り締まりが強化され、包囲捜索強襲のリスクが存在する状況でのみ、略奪個体はうられ、あるいは軍駐屯地からとおくはなれた友人に預託されるのである。

カラモジャにおける小火器と軽火器の拡散に関して、ウガンダ首相府が防衛省の協力をえて 2007 年に改訂された報告書「カラモジャの人間の安全保障と回復の推進のための基盤整備 2007 年-2010 年」の 2 章は、バーバー [Barber 1964] やウェルチ [Welch 1969] の歴史研究を引証しながら、次のように指摘している。カラモジャが英国保護領の行政管理下におかれる前後、つまり 1910 年代には、交易者は象牙とひきかえに近代火器をさしだし、近代火器は象牙や奴隷と交換された。カラモジャの自動ライフル銃は当初、狩猟のための道具として配給され、あるいは象牙の報酬として支払われ、そして次に奴隷と象牙の交換の媒介として、つまりある種の貨幣として流通していた。

カラモジャにおける銃は、モノとしてのゆるぎない有益さをおびている。銃は狩猟に使用されるし、家畜の捕食者を撃退することができる。さらに今日では、銃の守護によってはじめて、毎日実行される日帰り放牧において略奪と死のリスクを軽減することができる。その意味では、現代のカラモジャの牧地において銃は不可欠である。それだけではない。家畜を略奪さ

20) ドドスの居住する県都のカーボンでは毎週 1 日開かれる家畜市があり、人びとはそこで牛、山羊、羊をうることができる。

21) 湖中 [2004] は、サンプルの男性が、隣接する異民族、トゥルカナからの略奪の危機感がたかまった時、去勢牛を売却してえた現金を銀行に預金することによって、略奪を回避した事例を報告している。調査実施時において、中心地のカーボンをふくめて、ドドスの居住地には預金可能な銀行は存在しなかった。

れた後でも、銃による略奪を完遂することによって、放牧群を補てんし、生存することができる。長期にわたる外部社会からの武装解除の要求にもかかわらず、カリモジョンやドドスにおいて銃が所持され、使用される背景は以上のようなものである。

6. 武装解除の実態と人びとの記憶

カラモジャの銃を対象とした武装解除は、オボテ政権によって1983年から85年にかけて実施されて以来、連続的にあるいは単発的に歴代諸政権により試みられてきた。政府文書はカラモジャへの軍事介入を、「不法」入手した武器を使った物理的暴力にたいする正当な平定行為と位置づける。だが、カリモジョン、ジエ、ドドス語で「銃刈り」とよばれる、国家との対面は、隣接集団間の略奪紛争とともに、カラモジャの紛争史として記憶されている。

第一の例は、ミルトン・オボテが国境の県に設置した民兵組織を活用しつつ、隣国のケニア政府から武装ヘリコプターを借用して実施された1983年から1984年の武装解除である。この期間中の1983年12月に、現在のナパック県のマタニ(Matany)やカンゴレ(Kangole)などで軍隊は集落や商店街を爆撃したが、これは、政府系の報告書では武装解除への抵抗にたいする懲罰(punishment)と位置づけられている[Office of the Prime Minister 2007]。しかしカリモジョンの目線からは、盗賊による復讐である。それは、徴発の名のもとに、キリスト教徒である兵士たちがクリスマスを祝って食べる牛の調達を目的にした略奪として始まった。それにたいしてカリモジョンは自動ライフル銃をもって抗した。当時8歳だったカリモジョンの男性は以下のように語っている。

【事例3】

ランゴランドから民兵が、「クリスマスの牛」を手に入れる目的で非常に多数の大型トラックでやってきて、マタニのロクワソニョン(Lokwasonyong)で攻撃した。別の民兵集団もカンゴレに到着したが、むかうべき場所がわからず、カンゴレで人びとに質問してこたえをえた後、マタニへむかった。やがてすぐに、マタニの方角から爆発音がきこえてきた。マタニの家畜キャンプで戦闘がはじまったのだ。カリモジョンは民兵に対抗し、戦闘は午後2時から3時にはじまった。民兵らは東へ、本隊があるモロト方面へおいはらわれたが、その途上、カリモジョンと民兵のあいだで激戦が生じた。カンゴレに到着したとき、彼らは激怒して、カンゴレの家々を爆破しはじめた。それは夜明けまでとぎれることなくつづき、銃撃戦がやむこともなかった。戦闘はきびしいものだったが、カリモジョンは民兵を屈服させ、彼らはモロトににげた。やがて、モロトに駐留していた国軍の兵士と民兵が、ランゴの民兵を支援しにやってきた。兵士は人びとをころしつづけ、爆破しつづけた。しかし彼らはおいはらわれ、方向を見うしない、分散してさっていった。ソロチ(Soroti)方面

へもどるものもいれば、モロトへ逃走した者もいた。8歳だったわたしは、カンゴレの半定住集落に父母とともにいた。爆撃のあいだ、わたしたちは走ることを余儀なくされた。教会まで走って避難した。彼らは教会を爆撃しないと知っていたからだ。そこで一週間、大勢の人びととともに避難生活をおくった。

第二の例として、カリモジョンの出来事暦のなかで「盗みの季節」とよばれる、1983年から85年にかけての治安維持計画の実施期がある。この時期は、軍人による現地住民への放火、爆撃、家畜没収、殺人が横行したこととともに、その結果、現地住民側の抗戦による物理的な衝突が生じただけでなく、「すべてのピアンが行き場をうしなった」と語られる。²²⁾ 南部カラモジャの人口の約7割にのぼる人びとが転地を余儀なくされたというドッジ [Dodge 1986: 760] の推計は、暴力の二次的・波及的な破壊性に関する人びとの語りを裏づける。

最後に、1986年には現大統領ヨウェリ・ムセベニのひきいる国民抵抗運動により、カラモジャの人びとが「人間がロープでしばられた季節」とよぶ、武装解除が展開された。銃を放棄せざるをえないように強いることを目的とした「カドニャ・メソッド」が実施されたといわれる。この「カドニャ」の原義は不明だが、「ムセベニの兵士が武器を没収しにやってきた。銃の提出をこぼんだ人びとは、膝と肘が接するようにしばられて、木やポールにつるされた」という人びとの説明から、見せしめ的な拷問ないし身体刑が実行されていたと思われる。²³⁾

「銃刈りの季節」は、過去の記憶であるばかりでなく、今日の武装解除介入下のカラモジャの日常生活とかさなり、身体的、社会的に更新される記憶でもある。2001年以降の武装解除の、三期にわたる介入政策の実態を概観しておこう。

非国家アクターが一方の当事者である紛争のばあい、それにたいする国家の介入は一般に、集権化された権威や行政組織、国家法の効力がとどきにくい辺境地域を、その枠外の住民の自由や人権にたいする脅威ととらえ、国家的秩序を行き渡らせることを意図している。すなわち、当事者社会の実情は精査されず、「決まり文句」のなかで指示される「自由の敵」や「無法者」が誰なのかについての判断は、国家の恣意にゆだねられる。北東アフリカ諸国の政府もまた、実証を欠いた「民族紛争の凶悪化」説を根拠にして、辺境地域にたいする平和強制 (peace enforcement) を実施してきた。カラモジャ武装解除・開発統合計画 (Karamoja

22) 「盗みの季節」の故地からの人口移動は、公衆衛生学的調査によって、1985年前半のカラモジャ全域の大規模飢餓の発生要因と位置づけられている [Dodge 1986: 760]。

23) アチョリランドとカラモジャの広域で、ヨウェリ・ムセベニによる新政権が同様の手法を使用した可能性がある。ベーレント [Behrend 1999] は、ムセベニのひきいる国民抵抗運動が権力を掌握した直後にアチョリの地で実行した武装解除について、「『三点束縛』ないしカンドーヤは、後ろ手に腕と手首を腰の高さで緊縛する拷問の一形態である。カンドーヤは胸を無理やりゆがませて呼吸困難をひきおこし、ときに腕の神経を深刻に損傷する」としている。この「カンドーヤ *kandooya*」は、カリモジョンやドドスのいう「カドニャ *kadonya*」と束縛の仕方およびその呼称が酷似している。

Integrated Disarmament and Development Programme : KIDDP) と名づけられた北東ウガンダへの武装解除介入は、まさにその現代的典例である。²⁴⁾

国連武装解除・動員解除・社会復帰研究所 [The United Nations DDR Resource Centre] によると、一般に今日の武装解除は、特定集団ないし地域内部の一般流通ルートや戦闘員からの携行可能な小火器の除去と定義される。

当初から、武装解除介入の意思決定の過程においては、牧畜民（の若者）をテロリズムをくわだてる「戦士」にみだて、中央政府への対抗勢力ととらえる、本質主義的な予見が露呈していた。2001年12月から実施された武装解除計画は、2000年3月に提出した動議、すなわち「カラモジャの戦士の武装解除に関連する解決と、近隣県への侵略を抑制し、参加型の自立的な開発計画へまきこむための動議」をもとに開始された。それを準備したのは、カリモジョン、ジエ、ドドスに隣接し、前年の乾季に大規模な略奪紛争の結果、数万人の避難民をうんだ東ナイロート系農耕民テソおよび西ナイロート系農耕民アチョリ出身の国会議員たちであった。

この「カラモジャの戦士の武装解除」がうちだされた後の11月には、ムルリ・ムカサ国家保安大臣が武装解除の政策目標として「武装したカリモジョンが隣人にたいしてテロ攻撃をくわえることを阻止し…（そして）カラモジャ内部でのクラン間のテロリズムをストップする」と発言した。²⁵⁾「カラモジャの戦士の武装解除」の計画は、2001年3月の大統領選をひかえたヨウェリ・ムセベニの選挙キャンペーンの際にさかんに引用されて、ウガンダ第二の人口をはこるテソという大票田をふくむ、カラモジャの近隣県の住民の支持をとりつけていった。2001年よりこうして開始された武装解除は、無差別で過剰な暴力を駆使して戦闘員を無力化する包囲搜索強襲の導入をふくむ、国軍兵士の暴力的軍事介入という特徴を共有しながら展開する。

上のムカサの発言には、カラモジャの牛略奪紛争とウガンダ北部を拠点とする神の抵抗軍 (Lord's Resistance Army : LRA)²⁶⁾ による聖霊一政治的暴力主義との同一視がみられるが、それは先述したドゥームとブラッセンルート [Doom and Vlassenroot 1999] の論文のなかでも確認される。また、ムカサの発言は、東ナイロート・マー語系牧畜民に特徴的な年齢組として

24) カラモジャでの統一的な作戦は当初、定住や農耕、賃金労働といった反生業牧畜的なツールとのバーター交換によって武器を回収するやり方を主体にしていた。銃の提出者は40枚のトタン板、牛犁、穀物粉、豆などの物質的な見かえりをえた。また軍隊への加入を希望する者は、銃を自発的に提出したのち軍事訓練を受けたうえで、治安部隊の兵士としてリクルートされた。小郡（サブ・カウンティ）ごとに145人が牛や村を守るため訓練を受け、警備にあたり、月給6万ウガンダシリングの賃金をうけとった。2002年から2003年にかけての小学校教師の平均月給は13万ウガンダシリング（約75米ドル）である。賃金労働の実利にくわえて、軍事訓練をうけた専門集団に組織的に守護されることが、昼夜の地元民や家畜の安全を効率的に確保する手段のように思えたために、カラモジャの家長たちは息子たちに治安部隊への加入を積極的にすすめていった。

25) The opening of a Workshop on: 'Feasible, participatory, peaceful and sustainable disarmament of the Karimojong,' organized by Action for Development of Local Communities (ADOL), in conjunction with USAID, held in Kotido, November 2000, quoted in Muhereza (2001).

「戦士」階梯（モラン）が存在することと、出自集団（「クラン」）間の関係は、固定的な敵対性をはらんでいることを前提としている点で本質主義的である。

筆者自身の現地調査での参与観察と聞きとりによってえた資料からは、武装解除実施の開始から間もなくして、介入の性格がおおきく変化したことが指摘できる。すなわち、2002年の第一フェーズの途中で、国軍の指揮者が西カラモジャ出身のアンドリュー・グチから、ウガンダの最大民族集団ガンダ出身のスラ・セマクラにかわってから、事態は急激に悪化した。まず、銃を自発的に提出した人びとに見かえりの物品はあたえられなくなり、次に、包囲搜索強襲を主体とする作戦への転換を機に、介入の暴力性が目立ちはじめた。具体的には、国軍兵士による女性への性暴力が横行し、男性のある者は性器をきりとられ、あるいは殴打された。圧倒的な武力を背景に、国軍に「徴発」された家畜が、国軍兵士各個人の現金獲得のために売却されたり、来客をもてなすための肉料理用に屠殺された。同時に、一枚布に身をつつんだ男性やオカッパに髪をあんだ女性など、伝統的な身なりをした者への暴力的ないやがらせも横行した。作戦実行にたいする牧民側からの応戦が各地で多発するようになると、定住的な集落の近隣集団の成員たちが毎朝集まって放牧地を決定したり、牧草や水場の条件の情報交換をおこなう集会や、若者たちの歌と跳躍ダンスの場への妨害が頻繁になった。カラモジャの人びとの独自の外貌と振る舞いの固有性と自律性をつみとることが、介入の過程につけくわったのである。

筆者は、ボコラやカラパタの駐屯地にいる兵士たちに話を聞いた。すると彼らは「ここでは会話はつうじない。拳と杖、平手うちだけを彼らは理解する」と話した。収容者がほかの者をなぐるよう命じられることもある。兵士たちは自分でも不法だと知っている行為を、その行為が道徳的に問題をふくんでいるとみなすことなく、おこなっているのである。このように兵士たちが自身の行為を、合法的で道徳的なものであるとみなすような論理は、このほかに、「彼らはあなたやわたしのように傷つかない」「彼はなぐられるのが好きなのだ」「あなたは彼らをしつけなければならぬ。われわれは『したがうこと』をおしえているのだ」という発言にもよくあらわれている。

第一フェーズ（2001年12月～2003年12月）では最初のうち順調に武器が提出された²⁷⁾が、中途より武装解除は暴走し、現地住民との物理的な衝突が深刻化するという事態になった。介入の影響がネガティブに転じる背景として、銃を提出して防衛手段をうしなった特定の集団が、武器を手放さなかつた集団に襲撃されるという、武装の不均衡が招いた問題があげら

26) 神の抵抗軍（LRA）はみずから霊媒を名のるジョゼフ・コニーにひきいられたキリスト教原理主義集団であり、1987年からウガンダ北部で反国家的な活動を展開した。その活動の動機や背景の解釈はさまざまだが、代表的なものとしては、狂人による無目的な暴力と恐怖の組織的な運動、北部に居住するアチョリの人びとによる中央政府にたいする不満の正当な表現、スーダンとウガンダの国家間の競合の産物などがある。90年代はLRAと政府のあいだで消耗戦がくりひろげられ、2万人以上の子どもが拉致され、最多時には190万人にのぼる人びとが難民化した。

れる。²⁸⁾ 2002年3月、神の抵抗軍の南進がウガンダ中部におよんだことから、国軍の再配置が開始され、カラモジャにのこされた部隊の戦力は激減した。この時、武装の不均衡にもとづく家畜略奪がたびかさなり、かろうじて難をのがれた家畜は狭隘な枯れ谷にかくされた。²⁹⁾ そのために、おおくの人口をかかえる平野部の定住集落では、ミルクへのアクセスをうしなつて深刻な飢餓がおこり、カリモジョンの人びとは首都のカンバラ (Kampala)、ウガンダ第二の工業都市ジンジャ (Jinja)、ケニア国境の町ブシア (Busia) や大商業地バレ (Mbale) への転地を余儀なくされ、そのおおくは路上生活者となった。

2001年から2003年の武装解除の実施は、アチョリでの神の抵抗軍による攻撃が活発化するとともに、たびたび中断され、軍備が再編された後には完全にストップした。そして神の抵抗軍が2004年に弱体化したとき、武装解除計画はふたたび開始された [Hollestelle and Simonse 2005]。第二フェーズ (2004年9月～2006年2月) では、銃の提出をこぼんだ者にたいする低軍事行動として、第一フェーズの後半より計画的に実施されていた包囲搜索強襲が公的に推進、実行されるようになった。³⁰⁾

27) 実施当初は、西カラモジャ出身で人びとの行動や環境、文化に精通しているアンドリュウ・グチがコマンダーとして指揮をとっている期間は非常に平和的なものだった。モロト県のモナリップ (Monalip) やコティド県のコペイン (Kopein) では、NGOや政府系団体の音頭でカラモジャの人びと自身がデモをおこない、銃の危険とともに銃の政府への返却が地域発展につながるという啓発メッセージを歌と踊りで練り歩きながらうたえた。自発的な武装解除を好意的にうけとった人びとはおおく、ボコラでは武装解除キャンペーンの開始から3日間で1,000丁の銃が徴発センターであるゴレリエット (Ngoleriet) にあつめられ、提出された銃は山とつまれ、灯油をふりかけて人びとの見まもるなかで焼却された。

28) これは、アチョリランドでのムセベニによる武装解除をめぐる記憶と相通的である。ここでもまた、丸腰となった人びとをまもるべき兵士がその後は撤退して、彼らが家畜略奪の標的となったのだった。すなわち、1987年には、西ナイロート系農耕民アチョリの居住地にあるナムサリ (Namsali) で、大規模な略奪をはじめたことがドドスの出来事層で言及されている。このときは、アチョリランドでムセベニが武装解除をおこなった。標的になった丸腰の人びとは、ムセベニの兵士によって復讐として放置、棄民されたという。ベーレント [Behrend 1999] によると、ムセベニ新政権の暴力的な武装解除の背景には、現地住民と旧体制との親密性があつた。アチョリの人びとは、オケロ前政権の支持母体であるウガンダ民族解放軍 (Uganda National Liberation Army: UNLA) の側にあつて、ムセベニの国民抵抗軍 (National Resistance Army: NRA) と交戦した。国民抵抗軍が権力を掌握してから実施された武装解除は、アチョリの人びとにはこのような過去の敵対関係にもとづく復讐と理解された。すなわち、ムセベニの兵士は復讐としてアチョリの人びとを丸腰のまま放置したというのである。ウガンダの植民地独立後の歴史は、暴力と対抗暴力の歴史である。「1960年代オボテのもとですではじまっていた政治の軍事化とともに、国家一ホップズによれば暴力を制限するはずの国家は、それ自体ますます暴力的な報復の道具と化していった。国家権力をうばいといった者は富をえるだけでなく、ほかの民族集団や宗教グループにたいして報復することができた。」 [Behrend 1999: 23]

29) ドドスは、おおきな家畜キャンプをつくって多数の銃と人手によって家畜を略奪から防衛するというかつての戦術を放棄し、かわりに、2, 3の家畜所有集団からなる小規模な家畜キャンプを狭隘な谷地につくり、敵に居所が知られないうちに別のキャンプ地へ頻りに移動するという手をうつようになった。武装した青年男性だけでなく、この作戦のなかで生存への不安と恐怖をつのらせた女性もまた、子どもをもとまって、モロト山、ナバク山、トロール丘陵、ロティム (Lotim) 山、モルンゴレ (Morungole) 山に身をかくした。

30) この強制的な武装解除において、現地の青年男性と陸軍とのあいだで武力衝突が生じ、両サイドに人命の損失をもたらした。たとえば、2005年7月28日には、ロトメにあつた半定住地で現地住民と陸軍大隊とのあいだで暴力的な衝突があり、軍側に12人の死亡者と3人のけが人があり、3人の地元の青年男性が死に、1人がけがをした。地元の青年たちは殺害された兵士から10丁の銃を奪って、逃走した。

2006年3月以降の第三フェーズの開始の背景としては、以下のような中央政府の事情が指摘できる。ひとつは、2005年1月のスーダン内戦の包括和平協定の締結によって南スーダンに配置されていた兵隊、兵力をカリモジョンに配置できるようになったことである。もうひとつは、低開発地域であるカラモジャには開発援助の外貨をよび込みやすいが、治安に問題があるために、これまでおおくのプログラムが頓挫してしまっていたのだが、この閉塞的状况を、利用可能になった兵力を活用して打開しようところみることができるようになったことである。包囲搜索強襲はひきつづき実行され、³¹⁾カラモジャからの転出者もふえつづけた。カンパラ市当局はカンパラの物乞いの8割がカラモジャ出身者であると推計している [Etengu 2007]。そして、彼らの一部は、イギリス連邦会議のカンパラ開催(2007年11月)にむけた都市部の環境浄化・整備政策(「清潔なカンパラをまもろうキャンペーン」)の一環として、2006年末から翌年年頭にかけてカンパラに隣接するムピジ(Mpigi)県の少年院へ移送された。

カラモジャの包囲搜索強襲では、「国家の安全確保のため」に、銃所持の情報収集に関する専門的な訓練をつんだ官憲が定住集落ごとに配置された。そして彼らは、軍や地方自治体、中央政府が現地に先におくり込んでいたセキュリティ監視官や諜報員³²⁾と結託して、積極的に内探し、包囲搜索強襲をしかけるべき集落を駐屯部隊に密告した。2008年11月時点でモロト県とナカピリピリット県にはすくなくとも、バラック、デタッチメント、ブリゲード、ディビジョンと4段階³³⁾に区分された、規模のことなる軍駐屯地(カリモジョン語およびドドス語では *ngikeyain* もしくは *mabus*) が24カ所で構築されているのが確認できた。もっとも規模のちいさいバラックにはそれぞれ50~100人の兵士が駐屯し、駐屯地は現地住民の定住集落があつまる地域にまんべんなく配置されている(図2)。包囲搜索強襲では管轄陸軍が夜明け前に集落を包囲したのち、内部の住民すべてを集落の外へつれだし、銃所持の容疑者をとらえるとともに、一軒ずつ家宅搜索する。住民は男女別に列をつくり、男性には身体検査がおこなわれる。そのあいだ、集落内では兵士が戸別に銃や銃弾、兵士を殺害した証拠とみなされている軍服、軍帽などを捜査し、回収する。銃以外のものが発見されれば、所持者は軍駐屯地に連行され、銃の所在に関する自白をもとめられる。また「伝統的戦士」の身につけるもの(色鮮やかな木綿のトーガや羽根つき帽子など)も強制連行に口実をあたえる「証拠物」とされて

31) 2006年10月にはコティド県のロプヨ(Lopuyo)で軍事介入とそれへの抗戦が生じ、2日間の戦闘で住民と軍の双方で合わせて78人の死者がでた。このフェーズが開始されて2年間で、ウガンダ国軍により1,500人以上の現地住民が殺害された。さらにこのフェーズではひきつづき、武装暴力に脆弱になっている地域にたいする武装者による攻撃が頻繁に発生した。

32) Regional Internal Security Officer, Gombolora Internal Security Officer, Parish Intelligence Security Organizer, Chieftaincy of Military Intelligence など。

33) 規模のおおきい順にならべると、ディビジョン、ブリゲード、デタッチメント、バラックとなる。

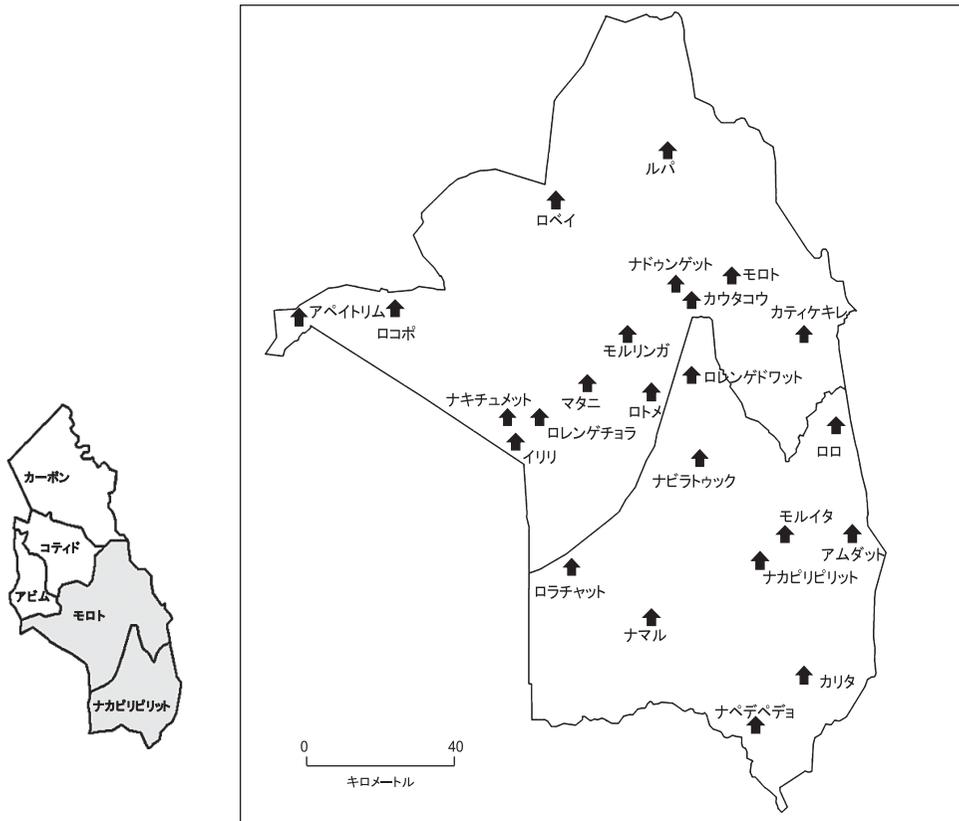


図2 モロト県とナカピリピリット県の軍の駐屯地（2008年8月時点）

いた。

収容経験者の語りから、軍駐屯地では定型化した拷問方法がとられていることがわかる。すなわち、(1) 兵士は地面に掘られた「拷問の穴」(ekucot ngolo akidic) に収容者を立位で胸まで埋めて上から杖でなぐりつける。(2) 司令官の小屋を建設するための石材はこび、水くみ、薪あつめ、草藁のための草あつめ、駐屯地内の草とりなどからなる労働を強制する。(3) 収容者が一日の大半の時間を過ごすのは、直径2~3メートル、高さ1.5メートル程度のトタン板の小屋(ejaara)である。20人前後がおしこまれるため、横になることはおろか腰を下ろすのも難しく、彼らは灼熱した小屋の内部でひざまづく姿勢をとりつづけなければならない。

人びとは収容所の内部の劣悪な生活条件をつたえきくだけでなく、女性のみ面談の許可される13時の、無言のみじかい食事のさしいれの際に、収容者の生傷や憔悴を目にすることによって、収容生活の過酷を知る。そのため友人や親族がつかまり、バラックに連行されると、あらゆる手段を講じて収容者の解放を試みる。

包囲捜索強襲により強制的に収容所に連行された者たちの消息を、表 4 として整理した。そこから、駐屯地から収容者を解放するキーとなる資源は、地方の役人とのコネクション、贈賄や銃の購入のための現金であることがわかる。とくに収容者がモロト軍事基地（ディビジョン）へ移送されないうちは、すなわち行政中心地からはなれた地域にある軍駐屯地にいるあいだは、収容者の友人や家族は諜報員や小郡の評議員に賄賂をわたし、あるいは謝礼を払って証言をえることによって解放をかちとることがおおい。³⁴⁾ なお、自発的に銃を提出したときに発行される証明書（写真 2）を提示することで解放された例もみられた。

強制的に連行された者にたいする、拷問をとまらう取調べのプロセスで、身体的な苦痛によって銃を所持していたという虚偽の自白をおこなう収容者もまれではない。いったん自白がなされると、その日の拷問はそれ以上続行されないが、翌日から銃提出がなされるまで毎日拷問がおこなわれる。そのため、収容者の関係者は解放への試みをつくすが、その一手段として、人びとは新規に入手した銃を提出する。

【事例 4】

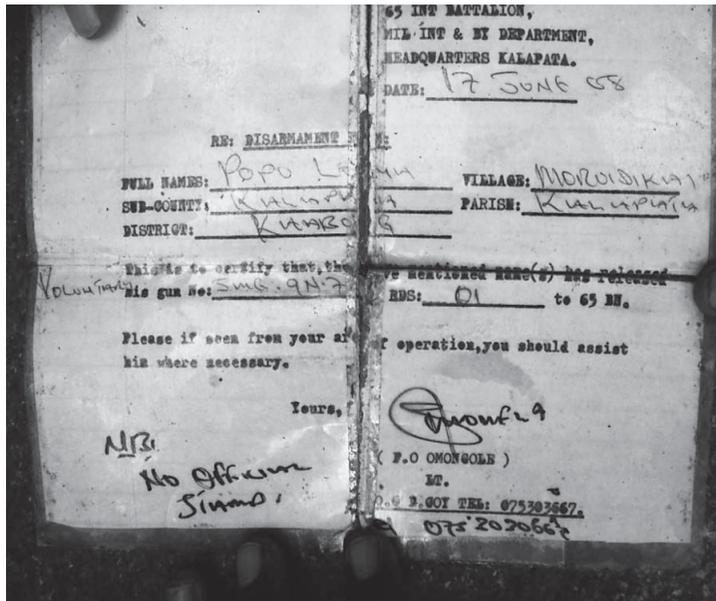
アチア・ロプステバは銃をもっていなかった。だが、2007 年 6 月、軍帽を保管していたために連行され、モルリンガ（Morulinga）デタッチメントに収容された。彼の兄はボコラにある銃の店（注 13）を参照）で 2 頭の牝牛と 1 頭の去勢牛でカラシニコフ銃を購入し、定住地集落の長にこの銃をわたした。集落長はデタッチメントの司令官にそれをわたし、アチアは解放された。

表 4 収容者の消息

	男性					小計	女性			小計	計
	10代	20代	30代	40代	60代		20代	30代	40代		
解放：銃の提出	7	10	8			25	1	1		2	27
解放：他者の証言	1	10	2		1	14				0	14
解放：現金支払い	3	2		1		6				0	6
解放：証明書の提示*			1			1			1	1	2
未釈放		1	2			3				0	3
不明	1					1				0	1
計	12	23	13	1	1	50	1	1	1	3	53

* 自発的に提出した銃と引き換えに発行される証明書は、証明書保持者を強制収容の対象から外す効力がある。

34) 諜報員に支払う賄賂の平均は、25 万から 30 万ウガンダシリングである。収容者が銃を所持していないことを、知り合いの役人に証言してもらうよう依頼する場合にも、1 万ウガンダシリング程度の現金の提供が必要になってくる。外貨レートに関しては注 24) を参照。



(証明書の内容)

Uganda People Defense Force 65 INT Battalion, Mil Int & By Department, Headquarters Kalapata

Re: Disarmament DPM:

Full Name: _____ Village: _____
 Sub-county: _____ Parish: _____
 District: _____

This is to certify that, the above mentioned name(s) has release his gun No. SMG9N7 RDS: 01 to 65 BT.

Please if seen from your area of operation, you should assist him where necessary.

(これは、上記の者が彼の銃 No. SMG9N7 を第 65 大隊に手放したことを証明する。軍事行動の実行地域で見かけた場合には、彼に対して必要な便宜を図るべきである)

Yours, (signature) P.O Omongole LT.

写真 2 自発的に提出した銃と引き換えに発行される証明書
 これは証明書の保持者を強制収容の対象から外す効力がある。

収容者を解放するために提供された銃はふつう、友人や家族のあいだでおこなわれる「返礼の期待されない贈与」としてとりあつかわれる。以下の事例において、収容者の解放のために提出された銃は、生物学的父親 (genitor) が収容者の妹が身ごもっている児にとっての社会的父親 (pator) となるための支払い (ekicul)³⁵⁾ として、収容者側親族にさしだされた、と語られた。

35) Ekiul は第一子の誕生後に支払われる。支払われる家畜の数は交渉によってきめられ、山羊 10 頭から 20 頭とともに牛 2 頭から 4 頭が支払われる。「子がうまれたという事実」にたいして支払われるものであり、第二子以降の子にたいする支払い義務はない。

【事例 5】

2007年4月、ンゴレメリはロトメバラックに連行された。そこで「銃はない」と5日間主張しつづけたが、拷問がひどく、朝に食物をさしいれたときに彼がとても消耗しているのを母は見た。さらに、バラックの兵士はモロトの軍事基地への移送に言及した。プタンというンゴレメリの妹が、アパーキリオンと暮らし妊娠していたが、プタンへの婚資の牛群の支払いは未済であった。彼は妊娠に際しての支払いとして、アフトマート・カラシニコフ銃を出すとンゴレメリの母に伝えた。これにより、児をジェニター側父系親族に帰属させるための「出産を剥がす」(*akitakauri*)とよばれる儀礼は完了したものとみなされ、ンゴレメリの父とアパーキリオンは小郡議長に銃を提出した。そしてンゴレメリは解放された。

表4からわかるように、収容者が解放された49事例のうち銃が提出されたのは27事例だが、そのうち、収容者自身が所有していた銃を提出したのは16事例であり、残りの11事例では別人の銃、すなわち収容者の兄弟、友人、夫、妻、姻族がもつ銃（解放のためにあらたに購入された銃をふくむ）が提出された。³⁶⁾

以上、過去および現在の武装解除を、現地住民の対応をふくめて記述してきた。政治家や官憲、軍人など中央権力による武装解除は、カラモジャにおいてかつてもそして現代も、生命と身体、そして日常生活への深刻な脅威となってきた。その被害者は、暴力的な包囲捜索強襲の対象となった集落の住民や収容所への収監者であり、また、収監者にたいして、彼を解放する協力者たちである。武装解除の暴力性は第一フェーズの途中から顕在化した。そして、その実践をささえる作用、すなわち、カリモジョンやドドスを、教化すべき非対称的で異質な存在と表象することは、包囲捜索強襲によって顕在化したのである。

7. 非人間化システムからの解放のために

Nomadic Peoples 誌による特集号「カラモジャにおける開発としての武装解除」[Krätli ed. 2010] に掲載された諸論者は、カラモジャの住民の生存をおびやかす KIDDP による無法な暴力を告発する内容となっている。家畜略奪紛争にたいする強大な軍閥 (warlord) やパワーエリートによる関与は 90 年代より指摘されてきた。だが、この特集のなかで明らかになっ

36) 収容所からの帰還者は銃の提出者にとって夫や兄弟、友人である。収容者との交換で手ばなされる銃は、象牙狩り隊のもとで強制労働をになった奴隷 (*epoota*) を商人からとりかえす際に、交易者にたいしてあたえられた銃の使用法とかさなるものとして語られることもある。銃が多様な人間的欲望を充足させる手段としての機能をはたしているとすれば、多義的な目的への手段である貨幣が自立して自己目的化したメカニズム、すなわちポリテリズム (*polytelism*) [Bouglé 1922] という機制を議論する素材となる。外部社会からの交易者の活動と、カラモジャの現地住民とのインターアクションに関する歴史記憶、とくにオーラルヒストリーにもとづく奴隷—牛—銃—象牙の交換のシステムの記述や事例分析に関しては、別稿にゆずりたい。

た、家畜をもたない牧畜圏域の周縁者たちが市場と連動した商業網のなかでみずからを「発展的な略奪者」に成形してきている事実には、とくに注目したい。³⁷⁾ これは、ムクトウ [Mkutu 2010] とイートン [Eaton 2010] がみいだしている事実であるが、彼らは共通して、2000年代の武装解除以降に、牛略奪の地域的な変容がみられたと考えており、動機が多様化していることに注意を喚起している。そこからみちびきだされることは、カラモジャで現地住民が主体となって生じている現在のあらゆる形態での武装暴力を、共同体によって承認され、成員全体が関与してとりおこなわれると記述されてきた略奪紛争の伝統的形態と同一視してはならないということであり、そして、そのようなカリモジョンやドドスの人びとを他者化する態度によって正当化される、暴力的な武装解除のやり方、すなわち、カラモジャの全集落・全住民を対象とした総員懲罰（コレクティブ・パニッシュメント）は、停止しなければならないという提言であろう。

包囲搜索強襲は、典型的には、日常生活でかかわる機会のない、遠国からの完全な他者によって編成された混成部隊が、現地住民に行使する破壊的な反政府行動抑圧作戦であり [González 2007],³⁸⁾ ムクトウとイートンが批判しているコレクティブ・パニッシュメントの中核的戦略である。カラモジャの武装解除の文脈でのコレクティブ・パニッシュメントは通常、包囲搜索強襲とおなじ意味でもちいられる [たとえば Krätli 2010]。包囲搜索強襲がひとりの容疑者のために、集落の全成員にたいして実行されるからである。

政府による武装解除は、財産を破壊し住民を傷つける暴力行為である。第6節でみたように、現在実施されている武装解除計画で住民が連行された時、家族や友人は収容者の解放につとめる。³⁹⁾ 解放を実現する有力な手段のひとつ、銃の新規購入や、収容者以外の所持者による銃の代理提出は政府軍への銃の提出という「成果」にちがいないが、収容者の自由とひきかえに銃を入手するという欲求をあらたに刺激している。銃をもたないものをとらえることによって徴収された銃は、武装解除の公的な「成果」としてカウントされるが、それは収容者自身の身体的受苦だけでなく、その解放を支援する者たちにたいしても経済的な損失という不条理な受難をもたらしている。強制連行をこぼみ、集落からつれだされる過程で自殺をはかる者がいる。みずからを抹消することによって、捜査の必要性和周囲の人びとの支援対象自体を消去

37) イートンはかつて軍閥、犯罪網、世界経済、パワーエリートと牛略奪の関連を説得的に否定してみせた [Eaton 2008]。東アフリカでの暴力紛争という社会的課題にとりくむためには、根本原因を特定し、除去する姿勢ではなく、集団間の関係が悪化してゆくシークエンスをみすえて介入策を案出することの重要性がうたえられていた。だが、ここ [Eaton 2010] では、紛争の根本原因として、縮小された略奪の企図の存在をおいている。

38) ゴンザレス [González 2007] は、バクダッドやカシミールでの駐留米軍や多国籍軍による包囲搜索強襲の実施への人類学者の深い関与を告発している。

39) 人が強制的に収容所に連行されてゆくと、カリモジョンやドドスの人びとは、*akilolong* という感情によって救出行動（銃の提出やワイロの支払い、「証言」者の登場）へと反射的につきうごかされるという。*Akilolong* とは「死別の悲しみ」であるが、死後の悲しみではなく、まさにいま死につつあるものと自己のあいだに生じる感情であり、たとえば略奪の戦闘中に仲間が被弾して息はあるが、みすてざるをえない思いをさしてもちいられる。

し、他者の生存をおびやかすまでに自己の生存に固執する意思はないことをしめすためである。住民の協同的対処は、カラモジャでの武装解除政策の文脈でのコレクティヴ・パニッシュメントを理解するためには、親密な他者の身体的暴力への配慮を共有する支援者たちがこうむるさまざまな苦しみも考慮する必要があることを示唆している。

包囲捜索強襲が集落というコミュニティ全体を対象として実行され、その過程で銃所持のみならず、カラモジャの牧畜民の伝統的な身なりや実践が抑圧の対象となっていたことを想起してほしい。彼らの外貌と振る舞いの独自性こそが、「教化」の過程でつみとるべき標となっていた。武装解除は、野蛮な牧畜民の教化という正義の意識によるささえをえた暴走という性格がつよい介入であったと位置づけられるのではないだろうか。

カラモジャに駐留し、現地地で実働する末端の兵士たちを改善された行動規範のもとで訓練すれば、問題は解決するのだろうか。筆者は楽観的ではない。ヒューズ [Hughes 1964] は、ナチスドイツで「汚い仕事」を一般市民としてのナチスの親衛隊がどのようにおこなっていたのかを問い、この仕事が「善人」によってなされていると示唆した。彼らは、他者がやってほしいと願いながらも自分たちはやりたくない、あるいはとてもはずかしくてできないことを率先しておこなった模範的市民だった。虐待主体の実行を観察することがフィールド研究にとって倫理的であるかを検討したテイラー [Taylor 1987] は、北米合衆国の精神病院で日常化している入院者への身体・性暴力をつうじての非人間化 (dehumanization) は、院外の「正常者」からの隔離と教化への期待にたいする、ケアテイカーたちによる応答にほかならないと説く。これはカラモジャで武装解除にかかわる兵士たちにもあてはまる。もちろん、兵士は自身の行為に関する道徳的な有罪性をまぬがれうるものではない。それとともに、周縁を遅れた野蛮な連中として本質化する他者認識をいだし、拘禁や訓育を社会的に受諾された統制形態として是認し、あるいはそれを正当化している社会も同様である。このような認識と構造のうえでの周縁化を、冒頭で引用したストレイト [Straight 2009] は問題視したのであった。この観点から、武装解除における駐留兵は、カラモジャにおける牧民の虐待システムの捨て石であるといえる。

強制連行された当事者、そしてその支援者たちに直接的で構造的な影響をおよぼしている、暴力的な武装解除は停止されるべきである。カラモジャでの武装紛争にたいしては、なんらかの対策がとられるべきであり、銃の使用を規制することは、その有効な方策のひとつであると筆者は考える。しかし、それを具体的に実施してゆく際には、さまざまな条件がみたされなければならない。武装の不均衡がおこらないように、国境をふくめ行政区分の境界をこえた、武装解除が同時的におこなわれなければならないことはいうまでもない。カラモジャをふくむ東アフリカ牧畜地域の暴力紛争に関してはこれまで、国家やエスニック・グループ、地域集団の統制から独立して暗躍する大小さまざまな利益者集団に対処するために、新しく法を整備する

必要性がとかれてきた [Krätli 2010]. 本論で記述した武装解除のシーケンスは、そのような法的正義にもとづく制度的推進への提言を暴力の解決につなげるには、なにより、異他的な主体が営む生活様式を疎外し、解体し、同化するという他者所有の欲望から国家を解放する必要があることを示唆している。東アフリカ「周縁」の暴力紛争という課題解決のための未来設計型の社会科学は、具象性に裏打ちされた認識科学にいつもささえられなければならないだろう。

謝 辞

本論は2009年10月京都での「紛争・難民・平和研究会」「牧畜研究会」「在来知研究会」の共催によるジョイント研究会での口頭発表（「武装解除計画は銃の需要を開発する—北東ウガンダ・カラモジャにおける「銃の除去」をめぐる国家主体と非国家主体の相克」）と、それに引き続くディスカッションを素材にしている。率直な質疑やコメントをつうじてディスカッションを生气づけてくださった京都大学の太田至教授、重田眞義教授の両先生と、小川さやか、金子守恵、黒崎龍吾、佐川徹、孫暁剛、内藤直樹の各氏に、心からの謝意を表します。

引用文献

日本語文献

- 河合香史. 2004. 「ドドスにおける家畜の略奪と隣接集団間の関係」田中二郎・佐藤俊・菅原和孝・太田至編『遊牧民—アフリカの原野に生きる』昭和堂, 542-566.
- . 2009. 「徒党を組む—牧畜民のレイディングと『共同の実践』」河合香史編『集団—人類社会の進化』アジア・アフリカ言語文化研究所, 149-170.
- 湖中真哉. 2004. 「牧畜民による市場の利用方法—ケニア中北部サンプルの家畜市の事例」田中二郎・佐藤俊・菅原和孝・太田至編『遊牧民—アフリカの原野に生きる』昭和堂, 650-686.
- 佐川 徹. 2009. 「書評：Kennedy Agade Mkutu. Guns and Governance in the Rift Valley: Pastoralist Conflict and Small Arms」『アジア・アフリカ地域研究』8(2): 215-219.
- . 2010. 「東アフリカ牧畜社会の小型武器と武装解除」川端正久・武内進一・落合雄彦編『紛争解決—アフリカの経験と展望』ミネルヴァ書房, 221-251.
- . 2011. 『暴力と歓待の民族誌—東アフリカ牧畜社会の戦争と平和』昭和堂.
- 曾我 亨. 2007. 『「稀少資源」をめぐる競合という神話』松井健編『自然の資源化』弘文堂, 205-249.
- ファーマー, P. 2011. 「人々の『苦しみ』と構造的暴力—底辺から見えるもの」A. クラインマン・J. クラインマン・V. ダス・P. ファーマー・M. ロック・E. V. ダニエル・T. アサド編『他者の苦しみへの責任—ソーシャル・サファリングを知る』坂川雅子訳, みすず書房, 69-102.
- 藤本 武. 2010. 「アフリカにおける牧畜民・農耕民紛争—エチオピア西南部の事例分析」『文化人類学』75(3): 347-368.
- 増田 研. 2001. 「武装する周辺—エチオピア南部における銃・国家・民族間関係」『民族学研究』65(4): 313-340.
- . 2005. 「西南部エチオピア, 戦いを介した民族間関係」『社会人類学年報』31: 169-190.
- レステル, ドミニク. 2009. 「ハイブリッドな共同体」大橋完太郎訳『現代思想』37(8): 216-239.

英語文献

- Anderson, D. 1986. Stock Theft and Moral Economy in Colonial Kenya, *Africa* 56(4): 399-416.
- Barber, J. P. 1964. Karamoja in 1910, *Uganda Journal* 28(1): 15-23.

- Behrend, H. 1999. *Alice and the Holy Spirits: War in Northern Uganda 1985-97*, translated by Mitch Cohen. Oxford: James Currey.
- Blystad, A. 1999. "Dealing with Men's Spears": Datoga Pastoralists Combating Male Intrusion on Female Fertility. In H. Moore, T. Sanders and B. Kaare eds., *Those Who Play with Fire: Gender, Fertility and Transformation in East and Southern Africa*. London: The Athlone Press, pp. 187-221.
- Bollig, M. 1990. Ethnic Conflict in North-West Kenya. Pokot-Turkana Raiding 1969-1984, *Zeitschrift für Ethnologie* 115: 73-90.
- Bouglé, C. 1922. *Leçons de Sociologie sur L'évolution des Valeurs*. Paris: Armand Colin.
- Broch-Due, V. 2000. Remembered Cattle, Forgotten People: The Morality of Exchange and the Exclusion of the Turkana Poor. In D. Anderson and V. Broch-Due eds., *The Poor Are Not Us: Poverty and Pastoralism in Eastern Africa*. Oxford: James Currey, pp. 50-88.
- Dietz, T., W. Adano and K. Witsenburg. 2005. Natural Resources and Conflict: Theoretical Flaws and Empirical Evidence from Northern Kenya, Keynote Address of First Annual Conference. Eldred: Moi University.
- Dodge, C. 1986. Uganda: Rehabilitation, or Redefinition of Health Services? *Social Science and Medicine* 22(7): 755-761.
- Doom, R. and K. Vlassenroot. 1999. Kony's Message: A New Koine? The Lord's Resistance Army in Northern Uganda, *African Affairs* 98: 5-36.
- Dyson-Hudson, N. 1966. *Karimojong Politics*. Oxford: Clarendon Press.
- Eaton, D. 2008. The Business of Peace: Raiding and Peace Work along the Kenya-Uganda Border (Part I), *African Affairs* 107: 89-110.
- _____. 2010. The Rise of the 'Trader': The Commercialization of Raiding in Karamoja, *Nomadic Peoples* 14(2): 106-122.
- Etengu, N. 2007 (June 27). Children Lured to Streets by Karimojong Women, *New Vision*.
- Fleisher, M. L. 1999. Cattle Raiding and Household Demography among the Kuria of Tanzania, *Africa* 99(2): 238-255.
- _____. 2000. Kuria Cattle Raiding: Capitalist Transformation, Commoditization, and Crime Formation among an East African Agro-pastoral People, *Comparative Studies in Society and History* 42(4): 745-769.
- _____. 2002. 'War is Good for Thieving!' The Symbiosis of Crime and Warfare among the Kuria of Tanzania, *Africa* 72: 130-149.
- González, R. J. 2007. Towards Mercenary Anthropology? The New US Army Counterinsurgency Manual FM 3-24 and the Military-Anthropology Complex, *Anthropology Today* 23(3): 14-19.
- Gourlay, K. A. 1971. *Studies in Karimojong Musical Culture*. Thesis Submitted for the Degree of Doctor of Philosophy. Kampala: University of East Africa.
- Gray, S. J., M. Sundal, B. Wiebusch, M. A. Little, P. W. Leslie and I. L. Pike. 2003. Cattle Raiding, Cultural Survival, and Adaptability of East African Pastoralists, *Current Anthropology* 44 (Supplement): 3-30.
- Gulliver, P. H. 1953. The Population of Karamoja, *Uganda Journal* 17: 179-185.
- Hazama, I. 2009. New Usage of Guns under the Third Phase of Disarmament Programme in Karamoja, *A Journal of the Institute of Anthropology, Gender and African Studies MILA* 10 Special Issue: 112-135.
- _____. 2010. A Review of Kaori Kawai's Works on Dodoth and Raiding, *Nomadic Peoples* 14(2): 164-167.

- _____. 2012. Daily Life as Poetry: The Meaning of the Pastoral Songs of the Karimojong in Northeastern Uganda, *Nilo-Ethiopian Studies* 17: 27-50.
- Hollestelle, M. and S. Simonse, eds. 2005. *Security When the State Fails: Community Responses to Armed Violence* Vol. 5. The Hague Conference. 30 and 31 May.
- Hughes, E. C. 1964. Good People and Dirty Work. In Howard S. Becker ed., *The Other Side*. New York: Free Press, pp. 23-26.
- Knighton, B. 2005. *The Vitality of Karamojong Religion: Dying Tradition or Living Faith?* Burlington: Ashgate.
- Knutsson, K. E. 1985. Preparedness for Disaster Operations. In C. P. Dodge and P. D. Wiebe eds., *Crisis in Uganda: The Breakdown of Health Service*. Oxford: Pergamon Press, pp. 183-189.
- Krätli, S. ed. 2010. *Disarmament as Development for Karamoja. A New Chapter in Dismantling Pastoral Production in Uganda. Special Issue of Nomadic Peoples* 14(2). New Milford: Berghahn Books.
- Krätli, S. 2010. Preface. Karamoja with the Rest of 'The Rest of Uganda,' *Nomadic Peoples* 14(2): 3-23.
- Mamdani, M., P. M. B. Kasoma and A. B. Katende. 1992. *Karamoja: Ecology and History*. Centre for Basic Research Working Paper No. 22. Kampala: CBR Publications.
- Mburu, N. 2003. Delimitation of the Elastic Ilemi Triangle: Pastoral Conflicts and Official Indifference in the Horn of Africa, *African Studies Quarterly* 7(1): 15-37.
- Mirzeler, M. and C. Young. 2000. Pastoral Politics in the Northeast Periphery in Uganda: AK-47 as Change Agent, *The Journal of Modern African Studies* 38(3): 407-429.
- Mkutu, K. A. 2008. *Guns and Governance in the Rift Valley: Pastoralist Conflict and Small Arms*. Oxford: James Curry.
- _____. 2010. Complexities of Livestock Raiding in Karamoja, *Nomadic Peoples* 14(2): 87-105.
- Mullin, M. 1999. Mirrors and Windows: Sociocultural Studies of Human-Animal Relationships, *Annual Review of Anthropology* 28: 201-224.
- Novelli, B. 1988. *Aspects of Karimojong Ethnology*. Museum Combonianum 44. Kampala: Verona.
- Oba, G. 1992. Ecological Factors in Land Use Conflicts, Land Administration and Food Insecurity in Turkana, Kenya, *Pastoral Development Network Papers* 33a: 1-23.
- Ocan, C. 1994. Pastoral Crisis and Social Change in Karamoja. In M. Mamdani and J. Oloka-Onyango eds., *Uganda: Studies in Living Conditions, Popular Movements and Constitutionalism*. Kampala: Centre for Basic Research.
- Office of the Prime Minister. 2007. *Karamoja Integrated Disarmament and Development Programme: Creating Conditions for Promoting Human Security and Recovery in Karamoja, 2007/2008-2009/2010*. Kampala: Republic of Uganda.
- Stites, E., D. Akabwai, D. Mazurana and P. Ateyo. 2007. *Angering Akuju: Survival and Suffering in Karamoja. A Report on Livelihoods and Human Security in the Karamoja Region of Uganda*. Medford: Feinstein International Center.
- Straight, B. 2009. Making Sense of Violence in the "Badlands" of Kenya, *Anthropology and Humanism* 34(1): 21-30.
- Sundal, M. B. 2002. *Mortality and Causes of Death among Karimojong Agropastoralists of Northeast Uganda, 1940-1999*. MA Thesis in Anthropology. Lawrence: University of Kansas.
- Taylor, S. J. 1987. Observing Abuse: Professional Ethics and Personal Morality in Field Research, *Qualitative Sociology* 10(3): 288-302.

The United Nations DDR Resource Centre. (<<http://www.unddr.org/whatisddr.php>> (2012 年 1 月 21 日閲覧))

Thomas, E. M. 1965. *Warrior Herdsmen: The Absorbing Chronicle of an Expedition to the Tribesmen of Northern Uganda*. New York: Knopf.

Welch, C. P. 1969. *Pastoralists and Administrators in Conflict: A Study of Karamoja District, 1897-1968*. MA Thesis in Arts. Kampala: University of East Africa.